

桃の華は鮮血に染まる～人格が変わった時、女桃太郎は血の海で嗤う～

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

桃太郎は三姉妹の次女だつた……

拾い育てるは双子の陰陽師

桃の瞳が紅に輝く時、相手は鮮血に染まり逝く
全く新しい桃太郎が始まる……

目

次

出会い編

01話

02話

03話

04話

05話

06話

燐・桃・紬 それぞれの旅編

07話

08話

黄泉の国編

10話

11話

12話

13話

社巡り編

14話

15話

襲撃編

17話

18話

最終話

74 71 67

63 59 54

49 45 41 37

32 28 24

20 16 13 8 5 1

出会い編

01 話

私はただの式神だ。名はあるが必要がないので省くとしよう。今回は少し昔の話をしてやろう。偉そだつて？人間と違つて何百年と存在しているのだ。少しくらいの上から目線も当たり前だろう。先程少し昔の話と言つたが、今の人間が神話やおとぎ話と呼んでいるような話が現実だった頃の話だ。

今からする話も信じられないかもしねないが、私にとつては本当にあつた現実なのだよ。信じてほしいと思つて話すわけではないが、嘘と決めつけて聞くのだけは遠慮願いたい。君だつて自分が体験したUFO目撃や心霊体験を他人に話した時に最初から嘘と決めつけられて聞かれたら嫌だろう？そういう事だ。

昔々、ある所に燈子とうこと月代つきよという娘が暮らしていた。

ある日、月代は山へ兔狩りをしに、燈子は川へ洗濯に行つた時のこと。

月代が兔を何羽か仕留めていると、子供の大きな泣き声がしてきた。慌てて声のする方に行つてみると、まだ幼い少女が狼の群れに囲まれていて、今にも襲われそうになつていた。

少女は手にした木の枝を振り回して追い払おうと必死だったが、狼は疲れるのを待つているかのように距離を取つていた。

手に力が入らなくなつた少女は、最後の力を振り絞り一匹の狼に向かつて木の枝を投げつけたが、当たることなく手前に落ちてしまう。

それを見た狼の群れは一斉にとびかかった。間一髪のところで間に合った月代は指で印を結び狼たちに雷を落としてすべて倒してしまった。

月代は凄腕の陰陽師として名を馳せていた。

少女は何が起こつたのか分からず立ちつくしていると、月代は優しく声をかけた。

「お嬢さん、この辺は狼の住処があるからとても危険よ。早くお家にお帰り」

「・・・」

「私が一緒に家を探してあげるわ。どっちから来たかわかるかしら？」

「・・・ない」

少女はとても小さく掠れた声で話しだした。

「私には帰る家なんてない」

「お父さん、お母さんは一緒じやないの？」

「お父ちゃんとここまで一緒に來たけど、いつの間にかどつかにいつちやつた・・・」

「・・・お嬢さんはいつから一人でここにいたのかしら？」

「わからない・・・いっぱい夜が来ていっぱい朝がきたよ」

どうやら親に捨てられた子供のようだ。どうしようかと悩んでいると月代の背中から幼い子供の声がした。

「あら紬、起^{つむぎ}こしてしまったかしら？」

紬と呼ばれたその子は、両親が亡くなつた時に居合させた縁で二人が育てていた。

先程の少女が目を輝かせて紬を覗き込んでいる・・・それを見た月代は家に連れて帰ることに決めた。

月代が少女と出会う少し前の事―。

燈子が川で洗濯をしていると、川の方からむせ返る血の匂いが流れてきた。

嫌な予感を感じた燈子は指で印を結ぶと、目の前の地面が一瞬光り輝いた。その光の中から大きな雄叫びと共に一頭の虎が飛び出してきた。

「お願ひ」

燈子は一言伝えその虎に飛び乗ると、虎はもう一度雄叫びを上げ川の方に走り出した。そう、燈子も凄腕の陰陽師だった。

燈子と虎は、ものすごい速さで血の匂いがする方へ向かっていくと、大きな桃の木が見えてきた。その下で、惨い程執拗に切り刻まれた死体に囲まれた女の子が俯いたまま立っていた。虎は木から少し離れた場所女の子が見えない位置で止まつた。

「戻つて」

燈子はまた一言だけ伝え印を結ぶと、地面が光り、その中に虎は消えていった。

燈子は女の子に刺激を与えないように、ゆっくりと歩きながらこう話しかけた。

「お嬢ちゃん、こんなところで何をしているのかな？ もうすぐ暗くなるからお母さんの所におかれり」

女の子を見ると、握りしめた刀をカタカタと震わせながら、右目で燈子を睨みつけてきた。どうやら左目が開かないようだつたが、まずは落ち着かせる事を優先しもう一度女の子に話しかけた。

「何をそんなに怯えているの？ お家まで道がわかるなら私が付いて行つてあげるからさ。さあまずは刀を離しな」

すると、刀を持ったままの女の子が

「誰？」

と口を開いた。燈子は女の子の頭を撫でながら

「私？ 少し手先が器用な綺麗なお姉さんよ。川下で洗濯しようとしたら急に桃の木が見たくなつてさ、きちゃつた。お嬢ちゃんの名前を教えてくれるかな？」

「名前……わからない……何をしていたかも……どうして私は血

まみれなの・・・？」

「どうと、女の子はようやく刀を手放し、泣き出してしまった。どうやら記憶を無くしているようで、不憫に思つた燈子は家に連れて帰ることにした。

燈子が女の子を連れて家に帰ると、すでに月代がもう一人の女の子を連れて帰つてきていた。

二人は子供たちについて話し合い、女の子たちをここで育てる事に決めた。

「名前はどうしようか」

「一人は記憶が無くて、もう一人は・・・今までいい事は無かつたようだし、新しくつけてあげた方がいいよね」

二人は悩み、森で助けた子を燐^{あき}、もう一人はと名前を付けた。疲れていたのか、その間に二人は眠つてしまつっていた。一息つこうとする燈子の横で、寝ていた紬が泣き出した。

「あら、起きちゃつたの？」

「紬ももう少し大きくなつたら修行が始まるわね。三人はどんな陰陽師になるのかしら」

「歳の順に燐、桃、紬かしら。きっと美人三姉妹なんて周りに呼ばれるようになるわ」

月代は目を細めて子供達を見ていた。

燐と桃は二人がつけてくれた新しい名前を気に入り、紬の面倒をよく見てくれた。紬も二人を本当の姉だと思つてゐるようで、何をするにも後ろにくつついていた。みるみる成長していく三人を燈子と月代は優しく、時に厳しく見守り、五人での生活はとても幸せだった。

02話

——十年後——

「始め！」

合図と同時に桃は正面から一直線に駆け出していたが、燐が印を結ぶのを見ると右に転がつた！

その刹那、先ほどまで桃が駆けていた場所に無数の雷が降ってきた！

桃は転がりながらも何とか雷を避けきり、立ち上がると燐に向かって再度駆け出す。それを追うかのように次々雷が地面を削つて桃の後ろから追つてくる。誤差を修正するように少しずつ距離が詰まつていき、ついには桃の頭上に雷が落ちた！煙がまだ舞う中、燐が歩いてくると

「桃は考えなしに突っ込みすぎよ。いつも考えて行動しなさいって言つているじゃない」

とため息をつき、更に近づこうとすると、煙で視界がまだ晴れない燐の後ろから桃が飛び出してきて、

「まだ終わつてない」

と、燐の横腹目掛けて力任せに拳を振りぬいた。燐はその衝撃に吹き飛ばされ、近くの大木に激突した！しかし、すでに印を結んでいた燐は衝撃を防いでおり、くすりと笑みを浮かべ叫んでみせた。

「甘い！桃があんな雷避ける事くらい承知の上。わざと近づけば仕掛けてくると思ったのよ。案の定だわ。さて、そろそろ終わりに・・・？」

燐が読み通りと言わんばかりに話していると、先ほど桃に殴られたお腹のあたりが一緑色に光っている。式神のお札が張られていると気づいた時にはすでに大蛇が燐に巻き付いていた。

「小細工ね。常々言つているでしよう。お札を使つた式神は発現まで時間はかかるけど、触れてしまえば破るのは簡単だつて。

こういう時は前もつて陣から式神を呼び出しておくの。基本中の基本でしょ！」

「だから本命は、こっち」

桃が既に印を結び終え陣から出したものは・・・・炎だつた。
「ち、ちょっと待つて！周りの家が燃えちゃう――」

爆発に備えて燐が印を結ぶ為に腕を前に出した瞬間、炎が出ている
陣を足で踏みつぶした月代がそこまでと言つた。

月代がため息をついているのを見た桃は、頭をぽりぽりとかきながら
やり過ぎた事を後悔した。

「おお！桃姉の勝ちだ！今度はボクが相手する！」

「いえ、今度は燐と紬でやつて頂戴。近接抜きで」

「え――！」

紬は口を尖らせていたが、燐が息を整え戦闘態勢に入ると、仕方ない
といふ顔をしながら袖からお札を三枚取り出した。陰陽師の修行
はいつも三人で切磋琢磨している。仲がいいのは変わらずだが、負け
ず嫌いに育つたせいか特に燐と紬は競い合うかのように術を覚えて
いった。桃はそんな二人と一緒にいる事で自然と術を覚えていった。
前にこんな事もあった。

三姉妹として修行を始めて五年程経つた頃だろうか。ある日、三人
がいつものように修行をしていると、燈子がやつてきた。いつも各地
に飛び回っている燈子が村にいるのも珍しかったが、燈子が三人伝え
た内容は輪をかけて珍しい話だった。

「今、村の付近に靈獸が居るのを感じるわ。それも三体よ」
「靈獸ですか？式神として契約できそうかしら」

「式神！式神！これでボクが最強にまた一歩近づいちやうね！」

「・・・」

三者三様の反応に少し呆れた燈子は続けた。

靈獸というのは妖怪が食べればその力を自身に取り込み、陰陽師が
契約すればその力を貸してもらう事ができる。ただし、契約する場合
は条件や靈獸からの要求がある場合が多い。また二重契約もできな
い為、誰とも契約していない事も条件の一つだ。故に契約するのが難
しい事が多い。

「それぞれ気になる気配に行つてみなさい。運が良ければ契約出来るかもしれないわ」

燈子が話し終える前に、燐は指で印を結びだした。すると、目の前の地面が一瞬光り輝き、その光の中から何か大きな生き物が燐に飛びついてきた。それは大きくて白い虎だった。燐は虎を撫でながら、優しく話しかけた。

「久しぶりね、白虎。遊んであげたいけれど、今は一番近い靈獸の所まで連れて行つてくれる？」

燐が飛び乗ると白虎は嬉しそうに一鳴きし、気配を感じる方角に走り出しあつという間に視界から消えていった。

続いて紬も印を結びつつ

「燐姉ずるい！抜け駆けは駄目だよ！」

と言いながら地面を指差すと、やはり目の前の前の地面が光り輝き、その光の中から今度は大きな鳥が現れた。
すぐさま紬は鳥に飛び乗り行つてしまつた。

「貴方はいかないの？」

「使わないから」

「契約出来れば燐は褒めてくれるし、紬はもつと貴方を好きになつてくれるわよ？」

「！」

桃は少し照れながら、燈子に刀を借り、行つてきますと咳いて走つて行つた。

03話

最初に靈獸と対峙したのは燐だつた。

白虎から降りた燐は軽く撫でた後に印を結び、白虎を陣の中に戻した。

「靈獸様、お待ちください。」

燐は靈獸の正面に立ち、声を掛けた。

「陰陽師か。何用か」

「おつしやる通りまだ駆け出しの陰陽師でござります。九尾様とお見受けしますが、まずはお名前を伺つてもよろしいでしょうか。」

そして契約をまだ誰ともされていないのならば、私を試していただけませんでしようか」

「ふむ。最近は儂を式神にしようと声を掛ける醉狂な者も随分減ったからな。少し話を聞こうか。人は儂の事をただ九尾と呼ぶが、

今は白とでも呼ぶがよい」

「ありがとうございます。白様、質問を許していただけますでしょ
うか」

「応」

「白様は人間をどうお思いでしようか」

白はしばらく考えたあと、

「難しい質問よな。人は善悪入り混じつておる故、一括りに判断はできまい」

「ではどういう人間に好意を持てますでしようか」

「力がある者だな。我と契約を望むならその力見せてみよ！」

そう言うと、白は身体を震わせた。すると、白い尻尾が燐に向かつて飛んできた。

燐はとつさに『守の陣』を自身に掛けたが、勢いそのままに吹き飛ばされ地面に転がった。

「くつ、白様……」

「力をぶつける時だ。無礼講でよいぞ」

「そう……なら白、不意打ちなんて小物みたいな事しないで貴方の本

当の力を見せて頂戴。そうでないと白が私と契約するに値するかわからぬわ』

「?」

燐がいない。と思った瞬間、尻尾の一つが爆発した。慌てた白が振り返ると燐が印を結び終えていた。

白が慌てて距離を取ろうと後ろに飛びのくと、そこには白虎が待ち構えていて二本目の尻尾を噉みちぎった。

「ぐああああ！お主は何者だ。駆け出しの陰陽師ではないな！」

「ごめんなさい、伝え忘れていたわ。私は駆け出しの『天才』陰陽師、燐よ。今から尻尾を順番に破壊していくわ。

降参する時は早目にお願いね』

可愛らしい笑顔で物騒な事を言つた燐は指を白に向けると、大きな亀のような生き物が上から落ちてきた。白はそれに潰され、さらにはどこからか蛇が現れ白に巻き付きついていた。燐が印を結んでいる間に白虎がもう一本噉みちぎる。燐が印を結び終えた指で尻尾を指すと、そこに雷が三回落ちた。白が降参するまでに燐が壊した尻尾は五本だつた。

——その頃、紬は猫又の虎徹と対峙していた。

紬は次々に襲い来る尻尾を避けながら距離を詰め、虎徹の顔面を蹴り上げた。虎徹は顔を歪ませ、お返しとばかりに鞭のようにしなった尻尾を二本同時に振り下ろした。一本目を避けた紬は、二本目を掴みそのまま地面に投げつけた。紬は印を結び『炎舞の術』を放つたが、虎徹は右手の爪で炎を切り裂いた。

「つむぎん、面白い！面白いよ！」

「うつさい！とつとと契約しないと顔の形変えるからね！」

「そいつはおつかないが、まだまだ遊び足りねえなあ！」

虎徹は尻尾の形を槍に変え、紬に向けて放つた。慌てて距離を取つた紬は右に左に避けつつ印を結び始めた。

「にやはは！『守の陣』だつけか？あれで守らないと身体が穴だらけになつちまうぜえ！」

『『守の陣』は使わないの。だつて当たらないし。ボクも質問があるの
だけどいいかな?』

「何でも聞いてくれていいぜえ」

「あんたの尻尾つて回復するの?」

「ああ、何度も生えてくるぜ。だけど痛みは感じるから狙つてみた
らどうだ?」

「そう、安心したよ」

虎徹は二本の尻尾を棘の付いた棍棒に変えて同時に放つた。左右
から棍棒が向かってきた紬はその場から動く事もせず先程の印を結
び続けている。

「楽しかつたぜえ! つむぎん! もう終わりなのが残念だぜえ!」

「残念だよ。ボクもね!」

二本の尻尾に押しつぶされると思つた瞬間、紬の周り全てが凍つ
た。

「いてえ! なんだこれはあ!」

『『氷城の術』だよ。燐姉が作つたのだけど、ボクがやると印を結ぶ時
間がかかりすぎるし、自分の周りしか攻撃出来ないからあまり使えな
いと思つていたけど。術は使いどころが重要だね』

「なんだそりやあ! 聞いてねえ! 聞いてねえぞ!」

「言つてないからそりやそうでしょ? さあ、本当に顔の形変えてみよ
うか!」

虎徹の身体を軽業師の如く器用に飛び跳ねると、紬は左右の拳を連
続で虎徹の顔に叩きつけた。どうにか喋れるうちに契約出来たのは
虎徹にとつても紬にとつても幸運だつたかもしれない。

——桃は黒い九尾の前に立つていた。

「貴方が靈獸?」

「んん? ああ九尾の黒だ」

「式神になつて」

「いきなりだなあ。式神だつて?なんか得でもあんのかよ?」

と言つて黒は品定めをするように桃を見つめた。

「お前、人間か？あんまり知らねえ匂いと氣配だな」

「人間のつもりだけど」

「お前の中に何か・・・いや、気にすんな。んで、お前戦えるのか？」

「わからない」

「なんだそりや。力無き者に従う靈獸はいないぜ？」

「刀でなら少し」

「術でも刀でも俺が降参すればなんでもいいぜ」

「ごめんね」

「あん？ 降参かよ？」

「加減出来ないから、先に謝ったの」

そういうと、桃はすらりと刀を抜いた。まさか刀とは、靈獸相手に正氣とは思えない。黒は退屈凌ぎに軽く撫でて終わりだなと思つていた。桃は抜いた刀を持つたまま一直線に向かつてくる。黒はげんなりしながら尻尾をまずは一本桃に向けて放つた。尻尾は桃の頭に落ち、大きな音と共に土埃が舞つた。しかし、悲鳴を上げたのは黒の方だった。

「ぎやあああ！な、なにが起きた!!」

土埃の中、桃が刀を振り上げていて、尻尾は身体から切り離され遠くに落ちていた。

黒は自分の身体が震えている事に気付いた。桃から発している尋常ではない殺氣をすぐさま感じ取つたからだ。

このまま戦り合つたら契約以前に殺される！

「ま、待て！今ので充分お前の強さはわかつた。戦いはここまでにしよう！」

「式神は？」

「いや、その強さがあればお前に式神なんていらないだろう」

「いる」

「なんでだ！」

そう言われた桃はもじもじしながら答えた。

「姉と妹が・・・喜んでくれるから」

黒は呆気に取られた。あれだけ殺氣を放つていた少女が見る影も

無く恥ずかしそうにしていたからだ。俄然興味が沸いた。

「面白いな。いいぜ。お前と契約してやる」

桃はぱあっと顔を輝かせた。黒は調子が狂うなあと想いながらも

契約することに決めた。

三姉妹と、靈獣たちが合流してお互いの武勇伝を語り、燐と紬はどちらが凄かったのか言い合いになつた。その間靈獣たちは自分たちがどうやつてやられたかを丁寧に説明され居心地悪そうな顔をしていた。

「桃姉も無事力の証明出来たんだね！」

「たまたま」

そう桃は言つてちらちらと燐の方を見ていた。燐はそれに気づいて桃の頭を撫でながら優しく褒めてあげた。

「よく出来たわね。流石、自慢の妹だわ」

照れた桃は紬の後ろに隠れてしまつた。どちらが姉かわからない光景だつた。

燐と白、紬と虎徹、桃と黒、はそれぞれ少し離れた場所に一度移動した。これは契約上の決まり事で契約時の条件や要求が他人に漏れてしまう恐れが無いようにする為だ。お互い命に関わる内容故に、決して身内にも話してはいけない決まり事になつてゐる。

桃は黒の隣に座り込んでいる。

「さつきはごめん」

「気にするな」

「うん」

「まずお前たちは何者で何を目的に修行をしている」

桃は三人の関係を伝え、燐と紬が実の姉妹ではない事や、陰陽師の燈子と月代に拾われた事を説明した。

「なるほど。事情は理解した。まあ俺は面白ければ何でもいいさ」

「楽観的」

「長く生きているとそういうのが大事になつてくるのさ。お前には他

にも楽しませてもらえそうだしな。まずはその左目、何があるな。それにお前の中、何人いる?」

そういうと黒はじろりと見つめた。桃は俯いてしまった。

「記憶が欠ける時がある」

「ふうん。自分でもよくわからねえのか」

「うん。もし契約してくれるのなら、記憶が欠けた間に何をしていたか教えて」

「知らない方がいい事が多いと思うぜ? それでもか?」

「うん」

しばらく見つめていた黒は桃の正面に立ち頭を下げた。

「桃、俺と契約をしてくれ。要求は陣の中に戻す事無く常に俺を傍に置く事。見返りとして、今後欠けた記憶は俺が埋めると約束しよう。条件は何かを成す時、それが善き事か考え続ける事。万一、人の道を外れた場合は命を持つて償う事。その時は俺も一緒に命を絶つてやるよ。それでよけりやあ新しき名を頂きたい」

「名前……黎れいで、どう?」

「黎か。気に入つたよ。よろしく頼むぜ、桃」

「身体小さくできる?」

黎はにやりとすると、とても可愛らしい子狐に変化した。

「これでどうだい? ま、普段はこっちがいいか」

そう言うと今度は漆黒の鞘に収まつた刀に変化して、桃の両腕に乗つかつた。

「桃にぴつたりの武器だろ?」

「ありがとう」

桃と黎が契約を終え、耀と紬の所に戻ると、あちらも契約が終わつたようで傍で白い子狐と黒い子猫がじやれ合つていた。

「桃姉、おつかえりー」

「桃、この子の名前を悠はるかに決めたわ」

「桃、よろしくな」

「よろしく」

「桃の契約した黒い九尾は？」

「ここだぜ？俺もこれからは黎つて呼んでくれ。よろしく、燐、紬」「びっくりしたわ。燈子さんのではない刀を持っていると思つたら、その子だつたのね。黎か、こちらこそよろしく」

「黒、じやなかつた黎よ、なかなかお洒落な事しているな。なら俺も持ち運びやすい恰好になろうか」

燐はそういうと小さい身体をくるりと回して白い扇子に変化した。燐は地面に落ちそうな扇子を慌てて両手ですくい上げた。

「悠は扇子になつてくれたのね。改めて黎も悠もよろしく。これから一層騒がしくなりそうね」

燐はくすっと笑つて、村に戻ろうと歩き始めた。その後ろで紬が「待つて、待つてよー！この子の話も聞いてよ！名前はねえ……」紬が後ろで喚いていたが、燐と桃は聞こえない振りして走り出した。それを見て紬は少し泣きながら追いかけてくる。

三人が無事、全員靈獸と契約出来たことを知つた燈子は流石に驚いていた。

燿と紬が模擬戦をしていると、桃が月代の隣にやつてきて座り込んだ。

「ごめんなさい」

「桃は少し加減つてものを覚えなさい。」

「でも、お姉相手に加減していたら勝てない」

「せめて他人を巻き込まないようになさい」

「わかった」

月代は戦っている二人に目を向けたままだが、別の事を考えていた。桃に対しても心配している事があるからだ。

「・・・ところで、左目は相変わらず開かないの？」

「開かないけど支障はないから」

桃は答えたが、この左目こそが月代が心配している事だ。

実は少し前にある事件があつた。紬が森に行つたまま夜中になつても帰つてこなかつたのだ。普段から修行で森の中を飛び回つている紬が迷うとは思えない。『何かおかしい』と燈子と月代が探しに行こうとした時だつた。

眠つていた桃がいつの間にか後ろに立つていたのだ。起きていたのが不思議だつたのではない。普段とは反対に、右目が閉じていて左目が開いていたのだ。紅の瞳を妖しく輝かせていた桃を見た時、二人は圧倒された。まるで身体が金縛りにあつたかのように動かすことが出来なかつた。

そんな二人を見る事も無く、桃は闇の中に溶けるように消えていった。——瞳の残像だけを残して。

桃は闇の中、疾風の如く駆けていく。山に入つても速度は緩めず、山の頂近くの小屋まで迷い無く走り抜けた。今は誰も使っていない

筈の小屋には見張りが二人立っていた。素早く見張りから一本の刀を奪い、そのまま見張りの額に突き刺した。もう一人が驚いている間に刀をもう一本奪い取った桃は躊躇なくそれを相手の肩に向け振り下ろした。少しの静寂の後、斬った先から血が噴き出し桃の髪を濡らした。

外の音を聞きつけ小屋の中からぞろぞろと屈強な男が出てきた。どうやら山賊が小屋を占拠していたようだ。

「なんだ、この小娘は」

「見張りがやられているぞ！」

山賊はすぐに武器を取り、桃を囲んだ。周囲を緊張が襲い、誰も動けないでいると囲んでいた山賊の一人がばたりと倒れた。いつの間にか桃が包囲網を抜け、ゆらゆらとそこにいた。桃の紅の瞳を見た山賊たちはまたも一瞬で姿を見失つた。今度は木の上から音もなく降りると、その勢いのまま一人を真つ二つにした。着地と同時に右にまわり、その場でくるりと一回転すると近くにいた山賊の首が三つ転がつた。恐怖を押し殺した山賊が武器を振ってきたが、刀で軽く受け止めるともう一本の刀で確実に首を落とす。桃は低い体勢で少し溜を作り、一直線に駆け抜けた。紅の瞳が軌跡を残した後、血の雨が一帯で降り注いだ。小屋から更に三人出てきたが、大胆にもその中に飛び込んだ桃は両腕を素早く振り上げる、左右にいた山賊は斬られた事に気付かないまま絶命し、その場に崩れ落ちた。残った一人は桃が手を交差すると首が森の中に、上半身と下半身はその場で別れて落ちた。

「てめえ何者だ！」

最後に山賊の頭目らしき男が右手に刀、左腕には紺を抱えて出てきた。

「これ以上近づいたらこの娘を、うわあああ」

山賊の頭目は最後まで喋る前に桃に右の腕を刀で小屋に張り付けにされ、もう一本の刀で肩から先を切り落とした。痛みで叫び声をあげている間に氣を失っている紺はその場に崩れ落ちた。桃は紺をちらりと見た後、ゆっくりと山賊の頭目の所に歩いていく。

「く、くるな！」

片腕から血を噴き出したまま叫んでいる中、今度は右足を切り落とす。片足になつて体制を崩してその場に転がった身体を踏みつけ、そのまま何度も刀を突きさす。何度も。何度も。やがて何も言わなくなつた男の髪を掴み上げ、刀を横に振り、首から下がどさつと地面に落ちた。桃はまるで大将首を取つたかのように山賊の頭を頭上に掲げた。首の付け根からぼたぼたと血が流れ落ち、すでに乾き始めていた返り血まみれだつた身体を更に紅く染めた。桃は狂つたかのように高らかに、そして楽し気に笑つた。

「は、ははは！はははははははははははははははははははははははは!!!!」

気が済むまで笑つた桃は紬に首だけ向け、狂気じみた顔で笑つて見せた。敵味方の判断がついていなかつた桃は、紬に敵対心が無い事を確認し後回しにしていただけだつた。桃は血の海をばしやりばしやりと音を立てながら紬に刀が届く距離まで近づくと、迷いなく刀を振り上げた。その時、桃に向かつて白い獣が飛び掛かつた。氣付いた桃が後ろに飛びのいたが、着地した地面が光輝き、緑色をした龍が現れ桃の身体に巻き付いた。何とか動こうと暴れている桃の前に一つの影が近寄り、素早く桃の首に何かを掛けた。すると、全身の力が抜けたように桃は気を失つてしまつた。

「桃……貴方が拾われた時の話は燈子さんから聞いていたわ。使う必要が無い事を祈つていたけど、準備だけはしていてよかつた……」

燐はそういうとその場にへたり込んだ。四神を同時に二体も召喚した燐の体力は限界だつた。別れて二人を探していた燈子と月代が少ししてから合流し、一行は満身創痍で家に戻つた。ようやく一息ついた後、桃と紬についていた返り血を拭きながら燐は自分が見た光景を二人に話した。

「そう……まずは燐が間に合つて紬が無事でよかつたわ。あの勾玉は何なの？」

「燈子さんから桃の昔の話を聞いてから何か怖い事が起きそうな気がして作つていたの。あの勾玉は首に掛けた相手の意識を奪うように

出来ているわ。効果は勾玉を外すまで

「流石、燐と言った方がいいのかしらね。でも勾玉を外さないと桃は一生目が覚めない事になるわ」

「あれは桃じやなかつた。笑いながら人を殺すなんて出来る筈がない。しかも、紬まで手に掛けようとするなんて考えられないわ」

黙つて聞いていた月代は今後について燈子と燐に伝えた。

「とにかく、朝になつたら私と燈子でもう一度小屋に行つてくるわ。燐は二人を見ていて頂戴。紬には桃の話はしないでおきましよう。桃については・・・目覚めるかどうか、そして目覚めたときの桃を見て決めましょう」

二人は頷き、ため息をついた。桃が目覚める事を祈つて。

朝になつて燈子と月代がもう一度小屋に戻り、目にしたのは燐が言つていた通り桃がやつたとはとても思えない光景だつた。

二人は術で死体と小屋を埋めた。万が一、村の住民がここに来た時に、ここで何も起きなかつたと思わせるために。

家に戻ると、桃と紬は既に起きていた、紬は森でうつかり寝てしまつたと思い込んでいた。桃は朝まで寝ていたと思つてゐるらしい。燐は二人の記憶に合わせていたようだったので、燈子と月代も紬を怒りこの話は終わりとした。

月代が桃の事を考えていると、まいった、と言う事が聞こえてきて意識を戦っていた二人に戻した。燐と紬の戦いは、どうやら燐に軍配が上がつたらしい。

「燐姉は術の発動早すぎる！」

「修行が足りないのよ。でも二連敗なんて恥かかなくてよかつたわ」

「今度は桃姉とやる！せめて一勝したい！」

「疲れたから、ごめんね」

月代はため息をもう一度してから三人が騒いでいるところに歩いて行つた。

ある夜、紬以外の四人が囲炉裏を囲んでいた。紬はどうに眠つてしまつたようだ。燐は一人に大事な話があると切り出した。

「ここから少し離れた島に、とても強くて悪い邪気の吹き溜まりを感じる。このままではいずれこの村にも、災いが訪れてしまうわ。今のうちに桃と二人で島の様子を見てくるわ。もしも危険と判断した場合は即封印、または祓つてくる」

燐子と月代は驚き、お互いの顔を見合させた後に燐子はゆっくりと口を開いた。

「あの島はね、鬼ヶ島と言われていて妖怪の中でも強力な『鬼』が巢食つているの」

初めて聞いた燐は驚き、口を開こうとしたがそれを制して燐子は話を続けた。

「今まで島から何物も出でてくる事が出来ないよう結界を張つていたのだけれど、結界が弱まつて燐も感じ取れるようになつたのね」

「そ、それなら急がないと！」

「結界でどうにかしてきた鬼ヶ島を一人で行つて無事に帰つて来られると思つている？燐は確かに強くなつたわ。だけどまだ実践経験が

全然足りない。想定外な事が起きた時に一瞬だけど躊躇する癖があるわ。その隙は命取りよ。例えば鬼ヶ島には『鬼』の他にも『憑き人』も沢山いるの。『憑き人』と戦つて燐は殺せる?」

「え・・・」

燐子が言つた『憑き人』とは、妖怪に憑かれた人間の事を指す。祓う術は無く、器となつた人間もろとも殺すしか手立ては無いと言われている。幸い村にはまだ『憑き人』が出ていない為、二人は対峙した事は無かつた。

「そういう事よ。どうしても行きたければしばらく旅をして心も鍛えなさい。そうね・・・修行も兼ねて黄泉の国まで行つてくるのはどう?その間にこちらも準備をしておくから。鬼ヶ島の話は旅から帰つてきた燐を見て結界を張り直すか戦うかを改めて決めましょう」

「修行が足りないというのであればここでも出来るわ。どうして黄泉の国なんて何処にあるかも分からぬ場所に行かなければいけないの?」

「黄泉の国は死者の入り口と言われているところから入れるの。場所については地図を描いてあげるから安心して。何も無ければ今の季節が終わる頃には戻つてこられると思うわ」

「時間がかかりすぎるわ・・・しかも死者の入り口なんて縁起が悪そうな所に行けなんて。納得する理由があるのかしら」

「もちろんあるわ。まず、ここで暮らしてから今まで村を出たことがないでしよう?修行だけはしていたけど、それしかしてないわ」

「修行をしていれば充分じゃない。他に何が必要だつて言うの?」

「ほら、そういう所よ。燐は視野が狭いのよ。まずは旅をして外を見てくる事。そして心を磨きなさい。正しき道を進む時に躊躇わないように。そして黄泉の国に有らせられる『イザナミノミコト』から『憑き人』を人間に戻す方法は本当にないのか。そして、弱まつている境界を張り直す為に必要な『ある物』をお借りってきて頂戴。島に行くのはそれからよ」

続いて月代は桃に冷たく言い放つた。

「桃は残りなさい。陰陽師としては申し分ないけど、燐は特別な子な

の。『普段』の桃では確実に足手まといだわ」

「お姉が行くなら「行く」

「・・・命を落とす事になつたとしても?」

「うん」

「桃!月代さんも!行く前から縁起でもない事は言わないで!確かに今は私よりも陰陽師の力は無いかも知れないわ。でも誰よりも強いう子になるのは桃なのは二人もわかっているでしょ。だからこそ桃には色々な経験を積んで欲しいのよ」

それでも目を閉じたままの一人を見て燐は続けて訴える。

「もう時間がないの。このままでは本当に間に合わなくなる。旅に出ると言うのなら、せめて村の人たちを連れてここから離れて。二人の話ならみんな聞いてくれる筈よ」

「本当に桃と一人で行くのね?・・・燐の覚悟はわかりました。許可しますよう。」

「?」

三人の会話に少し桃はついていけないようだつたが、それでも黙つて聞いていた。

「貴方達は離れない方がいいと私も思うわ。ではこちらから改めてお願いするわ。二人で『イザナミノミコト』にお会いになつてきて頂戴。村の皆の事は心配いらないから無事に帰つてくると約束しなさい」

「燐子さん・・・月代さんもだけど、どうしてそう落ち着いていられるの?」

そう言われると燐子と月代は笑いながら言いました。

「燐は観察眼も足りてないのね。ここは陰陽師の村よ。村人皆陰陽師なの。私たちは鬼ヶ島を見張る役目でここに村を作り、住んでいるのよ」

そう。燐、桃の住んでいるこの村は陰陽師の隠里だつた。その事にすら気づけなかつた燐はこのまま島に行つても何もできない事を悟り、

燐子と月代の言う通りに、黄泉の国の『イザナミノミコト』にお会いに行く事に決めた。紹に話せば一緒に行くと言い出すのはわかつ

ていたので二人は黙つて翌朝早くに家を出た。見送る月代は少し怖い顔をしていたのが気になつたが、怒つてはいないようで二人の手を強く握りしめて小声で一言だけ二人にだけ聞こえるように呟いた。
「二人ともどんなにつらい事が降りかかるても、決して考える事を辞めないでね」

「紬は怒るよね」

「お姉の代わりは紬だけ」

「そうね・・・とにかく急ぎましよう」

「おいおい、俺たちの事まさか忘れてないような?」

「二人じやなくて四人だぞ。」

刀と扇子から声がした。

「あら、貴方達は匹で数えるのではないの?」

「刀がしやべると目立つから黙つて」

そんな会話をしながら一人と二匹は黄泉の国に向かう旅が始まつた。

燐・桃・紬 それぞれの旅編

07話

「んんー。ん？」

紬が目を覚ますと、馬小屋のような場所に居て両手両足を縄で縛られていた。はて、ここは何処でボクは何をしていたんだつけ？霧がかかつている頭を振り、順を追つて思い出す。あの日、朝起きたら燐姉と桃姉がいなくて・・・二人を追いかけてる最中だつたんだつけ。

紬は二人が旅に出た翌朝、燐と桃が居ない事に気付き燈子に詰め寄つた。

「なんで！なんでボクは置いて行かれたのさ！」

「二人は紬を置いて行つたのではないわ。自分達に万が一何かあつた場合、代わりに村を守るのを紬に託したのよ」

「ボクが燐姉と桃姉の代わり？無理に決まつているじやないか！だったら無事に帰つて来られるように三人で行くべきじゃないの？」

燈子はため息をつきながら、なおも紬の説得を試みる。

「お願ひだから言うことを聞いて。すぐに帰つてくるから、それまで修行をして二人を見返してあげましょうよ」

「・・・そ、うか。ボクは足手まといつて事なんだね」

「そうよ」

外に出ていた月代が家の入り口の戸に立つてそう言い切つた。

「！」

「あら？自分でもそう思つたから口にしたのではないの？」

月代は玄関の戸にもたれかかりながら続けた。

「足手まといでないと言うのなら、試してみる？私から一本でも取れば追いかけるのを許可してもいいわ

「ちよつと月代！」

「いいじやない。修行の一環よ。紬、どうする？」

紬はすぐに立ち上がり外に向かつた。玄関に居る月代の前を通る

寸前に足を止め、

「そんなの、聞くまでもないよ。月代さん、今すぐやろう」

肩をすくめて燈子も続いて外に向かう。三人が外に出ると、袖と月代は少し離れて対峙した。間に燈子が立ち、二人の顔を交互に見て、もう一度確認する。

「これから月代と袖の模擬戦を始めるわ。月代が勝てば袖は二人が戻つてくるまで修行をして待つ。袖が勝てば一人を追いかけて旅に出る。それでいいのかしら？」

「ええ

「うん

二人が合意したのを確認した燈子は、呆れた顔をして開始の合図を発した。

「始め！」

合図と同時に動いたのは袖だった。一気に月代との距離を詰めて腹部に拳を連続で叩きこむ。しかし、月代は右手で印を結んでおり既に『守の陣』で腹部を守っていた。袖はお構いなしに狙いをつけずに月代の身体を殴りつけていく。月代は袖の拳の速度と打ち込んでくる場所を完璧に読み切り、『守の陣』で防ぎきる。隙を見て袖の足を引っかけ地面に転がした。転がった袖の頭を容赦なく踏みつぶそようと月代が足を上げたが、間一髪で袖は地面を転がり距離を取つて立ち上がる。袖は接近戦を諦め、月代から距離を取つた。一定の距離を保つたまま、月代を中心に物凄い速度で回りだす。途中、袖からお札を落としていくとお札が次々と袖の姿に変えていき、本物と偽物の区別がつかなくなつた。これは袖の得意技の一つの『罠式の術（あみしきの術）』で、多種多様な罠を仕掛ける事が出来る、袖との相性が抜群な術だ。今回袖が選んだのは『罠式の術・幻術型』だ。無数の袖が月代に向かつて同時に『炎舞の術』の印を結び始めた。どれが本物の袖か分からなければ避ける事は難しい。しかし、月代は慌てず袖が印を結び終えるよりも先に左手で印を結び終え、空に向けて指を指した。辺りが急に暗くなり、月代の周りだけ雨が降り出した。雨で偽物の

『炎舞の術』は消えていき、残った本物を、右手の『守の陣』で凌いでしまう。紬が呆気に取られていると胸に衝撃を受け跳ね飛ばされてしまつた。月代が円盤のようなものを飛ばしたのだ。それは月代の右手で発動していた『守の陣』だつた。非常識にも、守る為の術を紬に投げつけ攻撃として使つたのだ。燈子は月代の楽しそうな顔を見て大人げ無い。と呟いていた。

「紬、もう終わり？」

「ま、まだまだだよ！」

「そこまで！」

燈子は見ていられず月代の勝利を宣言した。

「何で!!まだボク降参してないよ！」

「月代は模擬戦が始まつてから一步も動いていないのだけれど。それでもまだやるの？」

「そ、それは……」

「そもそも、いつも三人でかかつても一本も取れない月代に一人で勝てるわけがないでしよう。ほら、二人とも家に戻るわよ」

そう言うと燈子は家中に入つてしまい、紬はその場に座り込んで涙ぐんでしまつた。月代は紬をしばらく見つめた後、すぐ傍までやってきて、一枚の紙を渡しながら小声で話し始めた。

「紬、よく聞いて。今すぐ颶を連れてこの紙の通り進んで二人と合流しなさい」

「え・・・だつて、ボク負けたのに」

「ええ、だからなるべく危険の少ない道を記しておいたわ。妖怪や『憑き人』と遭遇しても出来るだけ戦闘は避けなさい」

「本当に、いいの？」

「燈子に見つかる前に行きなさい。早く！」

紬は渡された紙を握りしめ村の出口まで駆け抜けた。家からかなり離れたこの場所までくればすぐに追いつかれることは無いだろう。

「颶！」

「そんなに呼ばなくてもいるつつうの」

「今からお姉ちゃん達を追いかけるから、ボクとついてきて！」

「にやはは！つむぎんみたいなお子様が一人旅かよ！よほど今の世の中つてのは平和なんだなあ！」

「平和じやないよ！だから颶にも来て欲しいんじゃないか！嫌なら村に残っていてもいいよ！ボク一人で行くからさ！」

「にやは！契約している以上、ちゃんとお守りしてやるよ。つむぎん

！」

颶の保護者のような言い方に怒りを感じたが、言い合いをしている間に燈子に見つかってしまうのは避けたい。紬は言い返したいのをぐつと堪え、先を急いだ。

「どうして紬を行かしたの？」

いつの間にか月代の後ろに燈子が立っていた。どうやら一部始終見ていたようだ。

「私達の願いを成就させる為よ。それには紬の成長は不可欠でしょう」

「そう・・・かも知れないわね」

月代のくれた地図の目的地には黄泉の国と書いてあつた。二人の目的地なのだろう。指示されている道のりは一見、遠回りに思えたが、実際に行つてみると、なるべく人と関わらない、かつ気持ち悪い気配を感じない道が選ばれていた。お陰で紬が戦うような場面は無かつた。颯が余計なことを言うまでは。旅が順調だった事もあって紬も気が緩んでいたのかもしれない。

「つむぎん！ちよつと待つた！」

「なに？まだ一人に追いついていないんだからゆつくりしている余裕はないよ」

「なんか嫌な匂いがするぜえ。こいつは人と・・・俺の大嫌いな旧鼠の匂いだ」

「妖怪が人を襲つているつて事!?」

「わからねえ。が、匂いは同じ方角からするな。俺はどちらでもかまねえが・・・どうする、つむぎん？」

「月代さんからは出来るだけ戦闘は避けるように言われているけど・・・颯、匂いのする方向を教えて」

「にやはは！お前ならそう言うと思つたぜ！久々の旧鼠退治だ！いこうぜ、つむぎん！」

紬は颯が言う方角へ木々を飛び移りながら最短距離を駆け抜けた。山から下り、しばらくすると村が見えてきて入り口に娘が一人倒れていた。

「お姉さん、大丈夫かい」

「ああ、お嬢さんは？」

「ボクかい？通りすがりの陰陽師さ。怪我をしているようだね。家まで肩を貸してあげるよ」

そう言つて、紬は娘を家まで送り届けた。娘はお礼に温かい食事を用意し、一泊泊まつていくように勧めてきた。それに応じた結果、紬はこんな格好で小屋に放り出されていた。

「なるほど。なるほど」

大分頭がはつきりしてきた。つまり娘の用意した食事には薬が盛られており、寝ている間に縛られたのだ。意地汚くおかわりまでせがんでいたら薬も良く効くわけだ。でも何故助けた娘にこんな仕打ちを受けているのだろう。紬がそう考えていると昨日の娘が小屋に入ってきた。

「おう、目が覚めたか」

「おはよう。お姉さん。昨日と話し方が随分変わつてしまつてしているけど、ボクはなんで縛られているのかな？」

「それはな、お前が陰陽師だからだよ！」

「陰陽師に恨みもあるのかな？」

「ああ、俺の仲間が随分殺されたよ。陰陽師にな！この村にはお前を歓迎する奴は一人もいねえんだよ！」

ここまで話してやつと理解した。ここは旧鼠に取り憑かれた人の村だったのだ。しかし『憑き人』とは違つてまだ助ける事は出来そうだ。

「ねえ、ボクの持ち物はどうしたのかな」

「全部山に捨ててきてやつたよ！」

「山に・・・ねえ・・・せめて川に捨てればよかつたのにね・・・颶！」
紬が叫ぶと縛つていた縄が千切れた。知らない人が見たら紬が物凄い力で引きちぎつたように見えただろうか。実際は紬の背中に子猫が潜んでいたのだが。

「にやはは！つむぎんの間抜けな恰好は見ていて愉快だつたぜえ！」

「こうなる前に何とかしておいてよ。旧鼠は嫌いなのでしょ？」

「まあ、つむぎんに社会勉強させてやりたくてよお」

よし、片が付いたらこの馬鹿猫を川に流してやろう。少しほ泳げる
ようになるかも知れない、と紬は思つた。

「お札は？」

「俺は気が利くからな。元通りにしておいてやつたぜえ」「気が利く……ね」

じろりと颯を睨みつけたが、とにかく先に済ますことをやつてしま
おうと呆気に取られている娘に素早く近づき額にお札を張り付けた。

「ぎやああああ！」

娘は苦しみだし、娘の身体から大きな鼠が飛び出してきて逃げ出
した。

「颯！」

「まつてましたあ！にやはは！」

颯は嬉しそうに叫ぶと猫又に変化し、あつという間に旧鼠に追いつ
いて左の爪で切り裂いた。お札を張った娘は糸が切れた人形のよう
にその場に崩れ落ちそうになつたのを紬が受け止め、そつと小屋の中
に横たわらせた。颯の後を追つて小屋の外に出てみると旧鼠が五四、
颯を囲んでいた。

どうやら、少しでも攻撃しやすくする為に人の身体から出てきたよ
うだ。

「つむぎん、どうしよつかあ？俺、弱い物虐め嫌いなんだよお」

颯はにやにやしながら聞いてきた。結局は全員仕留めるくせに。

「じゃあボクは先を急ぐから颯は旧鼠に食べられればいいよ」

「おいおいおいおいーーこの村人を見捨てるのかあ！そつかあ！つむ
ぎんはお姉ちゃんたち以外はどうでもいいんだあ

「本当にその口直さないと怒るよ……」

そう言いながら、両腕の袖からお札を二枚取り出し旧鼠に素早く張
り付けた。張り付けられた二匹の旧鼠は紬の「滅」という言葉と同時
に内側から爆発したように身体が破裂し、肉片が飛び散つた。

「ボクの分の仕事は終わつたよ」

「にやはは！残りは……こうだ！」

颯は残りのうち二匹を食いちぎつた。一匹は戦意喪失し、かなり遠くまで逃げていた。紬はいつの間にか鎧鎌に形を変えていた颯を投げつけると旧鼠は綺麗に真つ二つになった。

その後、正気に戻った村人達に感謝された紬は照れながら、今度は薬が入っていない食事をご馳走になつた。食事後、村を出た紬は颯を問い合わせていた。

「ねえ

「ああん？」

「今回颯の悪戯に付き合つてあげたんだ。そろそろ燐姉と桃姉がどちら辺にいるか教えてくれてないかな？」

「そんなの、月代の地図通り行けばいつか会えるだろ？」

「ボクを馬鹿にしているのかい？ 悠と黎の気配を颯が搜せる事位分かつてているのだよ？」

「・・・」

「そこの川、流れが強そうだねえ」

「わ、わかったよ！ ちつ、意外と分かつてやがる・・・あそこに山があるだろ？ あそこにあるよ」

「!? そんな近くにいるの？」

「ああ、間違いないなあ」

「そつか・・・颯、もう一つお願ひ聞いてもらつてもいいかな」

紬はそう言うと颯に説明した。

—その頃、桃と燐—

「ごめんなさい。ごめんなさい。見逃してください」

その娘はしゃがみこんで必死に叫んでいる。人魂のような物が娘を中心ぐるぐると回っている。

数刻前、娘は父親に頼まれたお酒を買い、家に急いでいる最中だつた。その時に酒屋の店主から、最近急に人が変わつたように暴れだす村人が増えていたから氣を付けるように言われたばかりだつた。その帰り道だ。急に寒気がしたと思った瞬間、目の前に『自分』がいた。何が起きているのかと思っていると、『自分』は人魂に変わつた。それを見て妖怪か何かだと感じた娘は、腰が抜けてしまいその場にしゃがみこんでしまつた。その人魂は娘の周りを飛んだ後、背中から娘の身体の中に入り込んだ。びくんと身体を仰け反らせた娘は買ったお酒が手から落ちたのも気にせずにそのまま動かなくなつてしまつた。しばらくすると、娘は力無く立ち上がり、左右に揺れながら一步ずつ歩き出した。その娘の顔は青白く、瞳の辺りは空洞のようになつていて、その中心に黄色い光が射している。

「また間に合わなかつた！」

娘の後ろにいつの間にか燐が息を切らしながら悔しそうな顔をしている。娘は『憑き人』化していた。陰陽師の村を出て、目的の黄泉の国まで半分位の距離を来ただろうか。これまでに『何人』もの『憑き人』を桃と燐は殺してきた。世の中では風邪程度の頻度で発生していく、

一日進めば必ず『憑き人』に出会つた。旅を始めた最初のうちこそ祓う手段がないかと燐は使える陰陽師の術を試してはいたが、全てが無駄だつた。最後には殺すしかなかつたが、燐は人の形をした『憑き人』を殺す度に心が曇つていくのがわかつた。それならば、と『憑き人』になる前に何とか出来ないかと気配を感じた瞬間に二手に分かれて探

すが、いつも間に合わない。今回もそうだった。

「燐、来るぞ」

悠が忠告した途端、『憑き人』は燐に向かつて突進してきた。燐は歯を食いしばりすぎて口から血が出ているのにも気付かずに、印を結んだ。

『憑き人』が燐の目の前まで着た瞬間、燐は白い扇子を広げ仰いだ。すると、『憑き人』は苦しむ間もなく一気に燃え上がり、崩れ去った。

「いい加減、人を殺す事には慣れたか？」

「慣れるわけがないでしょ！それに『憑き人』は人じやないわ！」

燐と悠が言い合っている所に桃が合流した。

「お姉、大丈夫？」

「ええ・・・今回も間に合わなかつたわ」

そう言うと燐は歩き出した。桃は気まずそうに後ろを付いていく。燐が『憑き人』を殺すといつもこうなる。桃が殺しても同様だ。燐の悲し気な瞳が死体を見つめるか桃を見つめるか違うだけだ。それが桃には堪らなかつた。

「今日は俺たちの出番は無しかい？」

「お姉が『憑き人』の気配に気づく前に黎が感じたら教えて。もうお姉には殺させない」

「そりゃいいが、桃がやつても多分燐は喜ばないぜ？」

「それでも、お姉にはもう殺させたくない」

桃にはそれしか出来ないと思つた。燐の心を助ける事は出来ないけれど、代わりに『憑き人』を殺す役は引き受けようとした。

夜も更けてきたので二人は眠れる場所を探した。たまに宿を取ることもあるが、基本的には野宿だ。二人は焚火を焚き、暖を取つている。悠と黎は子狐に変化し丸まつて寝てしまつたようだ。先程の事を思い出しているのか、二人とも何も喋らない。焚火の音だけが響いていて空気が重い。桃が焚火に小枝を入れた時だつた。不自然に強い風が吹き、焚火が消え暗闇に襲われた。

燐と桃は素早く立ち上がり、お互い背中合わせの形で死角を無くし

つつ気配を探つたが、かすかに妖氣を感じるもの、殺氣は感じられない。

いつの間にか燐の手には扇子が、桃の手にはすらりと抜かれた黎の刀が月の光で鈍く光っていた。

「桃！」

「！」

木の上から何かが飛んできて、焚火の跡がはじけ飛んだ。燐の一声で二人ともその場から飛び跳ねていたので怪我は無かつたが、二人の距離は離されてしまい、それぞれ木を盾のようにして身を潜めていた。

「おいおい、この気配は……」

「悠、お願ひだからそれ以上言わないで。頭が痛くなつてきたわ……」桃は一気に飛び出し気配のする木の上まで駆け上つた。意表を突かれた相手は右手に持つてある鎌のようなものを投げようとしたが、桃の方が早く、左手で手を掴まれてしまつた。気配の相手は斬られると感じ目を瞑り身体を強張らせた。

「痛い！」

痛みは刀で斬られたものではなかつた。桃は飛び出す前に刀を置いてきており、素手だつた。桃は残つた右手で相手のおでこを弾いたのだ。

「何、やつているの？」

「桃！一人とも無事？」

桃が相手に質問している間に燐は木の下まできていた。

「とにかく降りてきなさい。紺」

襲撃者は・・・紺だつた。

「にやはは！だからすぐにばれるつて言つたじやねえか！」

颯の嫌味な声が森の中で響いている。焚火の後を碎いたのは颯が変化していた鎧だった。紺は桃が手を放した途端、するりと木の下まで降りて俯いてしまつた。後を追つて桃も降りてきた。

「桃姉に殺されるかと思つた」

「妹を斬るわけない」

「だつて、ボクだつてわからなかつたら」

「紬だつてすぐにわかつたよ?」

桃に断言された紬は泣き出してしまつた。燐は紬の頭を撫でながら

「私たちが分からぬわけがないでしよう? 鳞まで使って……追いかけてきたの?」

「当たり前だよ! 起きたら燐姉と桃姉が居なかつたボクの気持ちわかる!」

「燈子さんと月代さんに止められなかつたの?」

「止められたよ! でも待つていられるわけないじやないか! ボク達姉妹でしょ? 何でボクだけ置いて旅に出たのさ!」

「燐姉に何かあつたら紬しか後を任せられないから」

「そんな、そんな都合の良い話ないよ! 抜け駆けはするいつていつもボク言つていいじやないか!」

燐の胸の中で紬は泣きわめいた。ここまで来てしまつたからには一人で帰す方が危険だ。燐と桃は紬を黄泉の国まで連れていく事に決めた。

紬が合流してからの旅は一言でいえば姦しいだつた。紬の底抜けの明るさは燐の心を少しずつ癒しているようで桃は自分にはできない事を自然とやつてのける紬が羨ましくもあり、誇らしくもあつた。紬が来てくれてよかつたと心から思つた。

|
???

「紬が無事合流したぞ」

「そう、感動の再開ね」

「一人で来させるなんて危険ではなかつたのか?」

「当たり前よ。紬の周りに『憑き人』を配置していないのだから」

「なるほど、な。また連絡する」

「ええ、頼むわ」

「ふふ。さあ無事に帰ってきて頂戴」

黄泉の国編

10話

「桃！このままだとみんな離れ離れになつちまうぞ！」

「気が散る。黙つて」

そう言つて桃は右に飛んで避け、飛び掛かつてきた死人を蹴り飛ばした。少し離れたところでは紺がすれ違いざまに死人を次々と殴り倒していた。燐の姿が見えないのは少し心配だが、青龍が空を舞つているので無事なのだろう。

「こいつら斬つても斬つても起き上がりがる。桃だつて陰陽師の端くれだろ？一気に倒せる術とかないのかよ」

「斬つた方が早い」

「数を考えろ！」

「・・・」

桃は少し考えた後、おもむろに黎の刀を頭上に放り投げた。桃は刀が頭上で回転している間に素早く印を結んで『炎舞の術』を放つた。「やりやあ出来るじゃねえか。んじやあ少し手伝つてやるよ！」

黎は宙に舞つたまま九尾に戻り、口から特大の『狐火』を吐き出した。桃の加減知らずの『炎舞の術』と『狐火』が重なり合つて地面を抉る程の大爆発を起こした。桃は右腕を高らかに上げると、刀に戻つていた黎を掴み走り出す。

「いい事考えた」

「あん？」

「刀のまま『狐火』吐いて」

「・・・なるほど。ほらよ！」

桃が死人を斬ると、斬られた所から火が上がった。刀が炎を纏つているようだつた。桃は切れ味が鋭くなつた刀を無造作に振り回しながら次々と切り伏せていく。

何故こんな事になつてゐるのか。それは一行が黄泉の国に着き、燈子が書いてくれた地図を頼りにようやく死者の入り口を見つけた時

だつた。いつの間にか死人の大群に囲まれていて、いきなり襲い掛かつってきた。そのまま入り乱れの戦闘状態になつたが、桃と黎の初共闘は意外に息が合つていた。

「桃が暴れているようだ」

「珍しいわね。あの子が黎と一緒に戦うなんて・・・それなら」

燐は一度青龍を戻し、新しい印を結んだ。目の前に出来た陣を指差すと、光の中から炎と共に深紅の鳥が現れた。

「朱雀、死人を燃やし尽くして！」

朱雀は燐に呼ばれた事がよほど嬉しかつたようで、大きく一鳴きした。空高くまで舞い上がつた朱雀は死人に目掛けて急降下していく。地面に着く瞬間に方向転換し、その燃えた身体で死人に体当たりをしていく。朱雀の近くにいた死人は次々と蒸発したかのように煙と共に消えていく。少し離れて戦つていた紬は朱雀が飛び回っているのを見つけ、桃の近くまで死人を殴りながらやつてきた。

「おいおいおい！桃ちゃん、なんだいあの鳥。次々と屍を燃やしてやがるぜえ！」

「お姉が朱雀を呼んだ」

「うん。三人で戦うのは久々だからね！ボクも張り切つちやおうかな！」

「にやはは。虐殺祭りか！先にいくぜ！」

颯は鎖鎌から猫又に戻り、左右に飛び跳ねながら死人を踏みつぶしていく。紬は袖に手を入れたまま桃と同等以上のスピードで戦場を駆けていき、走り抜けた後ろから爆発が起きていく。袖から落としていくお札が順に爆発しているようだ。『罠式の術・爆破型』だ。途中、空中で颯と紬が交差すると颯は鎖鎌に戻つていた。それを紬は振り回して小さな竜巻を作り上げ死人が空中に舞つていく。そこに朱雀が横切り蒸発させていく。気が付くと三人はお互いの背中を守るように対峙していた。紬は燐に向かつて叫んだ。

「燐姉！先に中に入つていいよ！」

「無茶よ！まだ数が多すぎるわ！」

「多分この死人は『イザナミノミコト』様の命令だと思うんだ。だからやめるようにお願いしてきてよ。それまでは桃姉とボクで食い止める」

「お姉、気を付けてね」

「……そっか。私達は三人揃っているものね……桃、紬の事お願い」「燐！今俺と悠の意識を繋いだ！何かあつたら連絡してやるよ！」

「ありがとう、黎！悠、道を開いて」

「妹二人だけ残して本当にいいのか？」

「自慢の妹達を信じなかつたら逆に怒られるわ。急いで！」

「わかった。では黎の真似でもするか」

朱雀の後ろを走っていた燐の手から離れて悠は九尾に戻り、『狐火』を朱雀にぶつけた。前方一帯の死人が蒸発するように消えた隙を狙つて燐は、死者の入り口に飛び込んだ。それを見届けた二人は背中を合わせる。

「なんかさ、桃姉と一人で戦うのは初めてかも！」

「楽しそう」

「へへ。そう見える？ボクと桃姉で燐姉の道を作るってなんか嬉しくて」

「……うん」

二人は戦場の中で笑いあつた。その間にも死人が取り囮んで少しずつ狭まつてくる。桃と紬が同時に印を結び出した。死人がその隙を狙つて飛び掛かってくるが、黎の『狐火』で消し炭にされ、颶の爪で引き裂かれていく。

「桃は取り込み中だよ。俺に挨拶無しで近寄れるとと思うなよ？死人風情が！」

「にやは！手ごたえねえなあ！数だけいたつて意味ねえんだよ！」

印を結び終えた二人は同時に叫ぶ。

「滅！」

周囲が氷の世界に変わった。二人同時に『氷城の術』を発動させたのだ。辺り一面は静寂に包まれ、吐く息が白い。ひとまず死人の気配は感じられず桃と紬は座り込んでしまった。

「い、いやー。張り切りすぎちゃつたね」
「ちょっと・・・休憩」

二人は手を繋いで深く息を吐いた。

11話

燐が洞窟を進んでいくと、少し開けた場所に出た。暗闇の中、微かに見えるのは正面の祭壇と、そこに静かに佇んでいる妖艶の女性だ。

暗闇の中でもかろうじて視界が閉ざされていないのは、女性が持つている鈍く蒼い提灯の光のせいだろう。妖気のような気配と神々しい雰囲気を併せ持ち、燐に気付いていないのか興味がないのか、一切視線を動かさない。燐は頭を垂れて恐れながらも声を掛けた。

「かしこみかしこみもうす。『イザナミノミコト』様で在られますでしょうか」

「・・・」

「わ、私は陰陽師の村に住む燈子と月代の使いで参りました。同じく陰陽師の燐でございます」

「・・・」

「お願いが二つ、いえ、三つございます。どうかお話を聞いていただくことは出来ませんでしようか」

ここまで問い合わせても燐の方を見向きもせず、『イザナミノミコト』は一言も言葉を発する事は無かつた。燐は根気よく話を続けた。

「二つは、村で様子を伺っていた『鬼ヶ島』の結界が弱まっている為、貴方様の羽衣をお貸しいただきたいと言う事。二つ目は、世の中のいたところで『憑き人』が現れ人々を襲っています。『憑き人』化した人を治す手立てがあれば教えていただきたいという事。そして三つ目は、死者の入り口で死人に今までに襲われて戦っている二人の妹を助けていただきたいのです」

「・・・」

「おい、相手にされてないぞ」

「それでも頼むしかないのよ」

燐と悠は小声で話していると、『イザナミノミコト』はようやくこちらを向いた。

「帰れ」

「え？」

「人……が……来るところでは……ない」

喉が焼けたような聞き取りにくい声が唐突に聞こえた。『イザナミノミコト』がようやく話した、それは拒絶の言葉だったが。燐はもう一度お願ひをしようとしたが、『イザナミノミコト』の姿は見えなくなっていた。代わりに大量の『醜女』が奥の通路から口々に叫びながら燐を囮んだ。

「ジョウオウヲマモレ！」

「ワガクニヲマモレ！」

「ニクキ『イザナギノミコト』ノテサキメ！」

燐は壁に追いやられていき、逃げ場が無くなつた。

「燐、『醜女』を突破しないと『イザナミノミコト』を追えないぞ」

「わかつてているけど……ここでは私たちは侵略者なのね」

「燐は自分が正しくない事をしていると？」

「いえ、人々を救う為に羽衣は必要よ。私は私が正しいと思つた事を成すわ」

そう言つて印を結び白虎と朱雀を呼び出す。白虎は燐を乗せ、目の前の『醜女』を爪で切り裂きながら蒼い提灯の光を目印に進んでいく。朱雀は追手を燃やしながら白虎の後ろを付いていく。

「このまま抜けるわ！」

広場を抜け、細い通路を白と赤の聖獣が疾風の如く駆けていく。『醜女』を蹴散らしながら。しばらくすると、先ほどの広場よりも少し狭いが、蒼い光が強く輝いている部屋に出た。どうやら『イザナミノミコト』に追いついたようだ。

「醜女を……殺した……か」

『イザナミノミコト』様！お話を聞いてください！」

『イザナギノミコト』の……使いと……話す事……は無い』

「私達は『イザナギノミコト』様の使いではありません！鬼ヶ島の結界の為に羽衣が必要なのです」

「信じ……られる……ものか」

『イザナミノミコト』が左手を向けると、袖から現れた肉塊が燐の右肩を捉え、そのまま壁まで吹き飛ばした。燐は壁に叩きつけられ、呻き

声を上げたが、意識を辛うじて保ち、『イザナミノミコト』を真つすぐに見据えた。

——一方、死者の入り口前——

桃と紬の戦闘は続いていた。数は大分減ったとはいえ、動き回つている二人の体力も限界が近づいていた。

「桃姉、疲れたら休んでいていいよ！ボクまだ元気だから」

「紬こそ寝ていていいよ」

「寝むれないよ！」

そんな軽口を叩きながらも息は上がっていた。そんな時、急に桃の身体が崩れ落ちるようにその場で片膝をついた。

紬は慌てて桃に走り寄ろうとしたが、死人に道を阻まれてしまつた「桃姉！」

鎖鎌を投げて応戦していたが一瞬、桃に意識を向けている間に死人が紬の首を噛みつこうとしていた。

「まずい！」

紬が間に合わないと目を瞑つた瞬間、その死人は桃に切り伏せられていた。

「桃姉ありがとう！大丈夫？」

「ええ、『私』は大丈夫よ。紬、今すぐ姉様の所に急いで向かって頂戴

「桃姉一人で戦うつもり？無茶だよ！」

『私』の事なら心配しないで平気よ。それよりも姉様が危険なの。お願い

「わ、わかつたけど・・・桃姉いつもと違わない？」

「あら、失礼ね。『私』はいつもこうよ。さあ、早く」

紬は不思議に思いながらも桃に言われた通りに死者の入り口に飛び込んでいった。

それを見届けた桃は入り口を背にして刀を構えた。

「桃、流石に俺たちだけじゃ厳しいんじやないか？」

「今から起きる事は一人に言つては駄目よ」

「・・・お前、誰だ？」

「『私』は桃よ」

そう言うと左手の指をゴキリと鳴らし、近くにいた死人の頭を握りつぶした。

——死者の洞窟内——

「旅の途中で『イザナミノミコト』様と『イザナギノミコト』様のお話を聞きました。『イザナギノミコト』様に對して思う事は私にもあります。私だつて女性ですから」

左肩と左足に肉塊が更に飛んできて燐は押し付けられたが、燐はそれでも『イザナミノミコト』に顔だけでも近づけようとぐいと前に出して続ける。

「ま・・・まだ愛しているのですよね？『イザナギノミコト』様を」右足を狙つて飛んできた肉塊が途中で止まる。

「イザナギは・・・逃げた・・・今の・・・私を見て・・・醜い・・・私を見て！」

「それでも！『イザナミノミコト』様は逃げた『イザナギノミコト』様を追う事を止めた！黄泉の国の女王である『イザナミノミコト』様なら『イザナギノミコト』様を追い詰めて殺すことも出来るのに！」

「それ・・・は・・・」

「でも、口で言うほど簡単には気持ちの整理は付かないから憎んでいる自分を演じている！神も人も変わらないのです！」

「・・・」

「鬼ヶ島の封印が解かれれば『イザナギノミコト』様がお作りになられた人々はいざれ居なくなってしまいましょう。ですから、どうか羽衣をお貸しください」

『イザナミノミコト』と燐はしばらく見つめ合つていた。どれくらい時が経つたろうか。不意に燐の身体が地面に落とされた。先程の肉塊と着地したお尻が痛み意識が飛びそうになるが、唇を自ら噛みしめなんとか耐える。『イザナミノミコト』は燐の前で見下ろしていた。

「燐と・・・いつたか」

「は、はい」

「話を・・・聞こう・・・」

そう言うと『イザナミノミコト』は燐の頭に手を乗せた。すると不

思議な事がおきた。燐は何処を見ても真っ白な空間に立っていた。手にしていた筈の悠もない。少し離れた正面に『イザナミノミコト』が佇んでいた。

「すまぬな。こちらの方が話しやすいのでな。お主と話をする前にお主の心を覗かせておくれ」

「私の、ですか？」

「お主が今まで何を経験して何を考えてきたのかを見せておくれ」

「・・・わかりました」

燐が承諾すると、燐の心中に『イザナミノミコト』が入ってくるような不思議な感覚と、それと共に今まで自分の見てきた景色、感情が入り込んできては消えていく。動悸が収まらず、呼吸が上手く出来ないまま視線を戻すと『イザナミノミコト』は正面から背後に移動していた。

「なるほど。燐よ、お主面白いのう。よく今まで生きてこられたものよ」

「？」

「まあよい。嘘を言つていらない事はわかつた。羽衣を貸すことを約束しよう。外の死人も全てお主の妹達に殺されてしまつたから案ずるがよい」

「ほ、本当ですか！ありがとうございます！」

「あとは『憑き人』についてか・・・あれは一度なつてしまえば祓う事は出来ぬであろうな。速やかに命を絶つてやるのがよからう」

「!!」

わかつてはいた。自分で今まで試してきたのだ。それでも神であれば、『イザナミノミコト』であればと期待していたのだ。神が言うのであれば自分の中で仕方ないと言い訳ができると思つてしまつた燐はひどい罪悪感に苛まれた。

「さて、お主の希望は全て叶えてやつたぞ。その代償ではないが、我の質問に答えてはくれぬか」

「質問ですか・・・答えられるものであれば」

「何、構える事はない。まず、お主は鬼ヶ島の結界を張る為に妹達と旅

をしてきたのであろう？何故じゃ？」

「何故つて・・・『イザナミノミコト』様が今、仰られたではないですか」

「鬼は悪か？」

「え・・・？」

「燐は鬼を見た事が無いのに悪だと思つておるのか」

「それは・・・島から邪惡な氣を感じて・・・」

「邪惡な氣と思い込んでいるだけではないのか？これは清い氣、これは邪惡な氣と教えられたからではないのか」

「・・・」

「では、人は正しいのか。正しいか正しくないかを決めるのは我ら神か、人自身か」

『イザナミノミコト』様が何を言つているのかがわかりません・・・まるで人が正しくないと言つているように・・・」

「何だ。分かつてているではないか。私はそうではないのかと尋ねておるのだ」

「・・・正しいと思つています。少なくとも私達は正しいか、いつも考えながら行動をしております」

「その正しさを教えた者が正しくなかつたら、とは思わないのか。お主が人に育てられたからそう思い込んでいるのではないのか。もし、人では無く鬼に拾われて育てられていたら今と同じ事を言えると思うか」

燐はもう何も言えなくなつていた。

「人は力が有りすぎる者、人とは違う者、それらを理解しようともせずに勝手に恐怖しそれを悪と呼ぶのではないか」

今まで燈子と月代に正しさを教え込まれてきた。人を守れ、人に仇名す者を祓えと。もし、もしもだ。『イザナミノミコト』が言つているような事があれば・・・燈子と月代が悪であつたら・・・自分が行つてきた事が全て悪であつたなら・・・燐の中で何かが崩れはじめた。次の『イザナミノミコト』の台詞は駄目押しの一言だつた。

「鬼は人とさして変わらぬよ。力が強い、賢い、身体が大きい等な。違

いがあるとすればそれだけぞ。そして耀よ、お主にも鬼の血が流れて
おる

「あ、ああ、あああああ」

「鬼は人とさして変わらぬよ。力が強い、賢い、身体が大きい等な。違
いがあるとすればそれだけぞ。そして燐よ、お主にも鬼の血が流れ
おる」

「あ、ああ、ああああああ

心臓が爆発しそうな位激しく動いた。燐は耐えられずに頭を抱え
座り込んでしまった。胃から熱いものが逆流し、吐き出しあまう。体
中の血が沸騰しているようだ。燐はたまらず懐から短刀を取り出し、
自らの肩を刺した。体に流れている血がとても醜く感じたからだ。
血が勢いよく噴き出し身体の半分を濡らした。痛みを感じなかつた
からもう一度刺そうと振り上げた手を、誰かが後ろから止めた。

『『イザナミノミコト』様！私が代わりに答えましょう！』

「つ・・・む・・・ぎ・・・？」

燐が虚ろな目で捉えたのは、いる筈のない紬だつた。

「ほう、妹か、ならば代わりに答える事を許そう」

紬は目を瞑つて呼吸を整え、覚悟のある瞳で『『イザナミノミコト』を
見据えて叫んだ。

「鬼が悪かどうかは実際にボクが見て決める！人が正しいかどうか？
正しい人も正しくない人もいる！それは恐らく鬼も同じでしょう！
ですからボクたちは自分で見て考えて決めます！」

『『イザナミノミコト』様は目を細めて紬を見ていた。

「ボクたちを育ててくれた燈子さんと月代さんが悪かどうかは……わ
かりません！けど、信じています！それでも正しくないと思えば……
ボクたちが正しい事を教えてあげます！」

紬の声がこだましていると思つたときには洞窟の中に戻つてきて
いた。

「そう……それが……考える……という事。我も……『『イザナ
ギ』の事……を長い間……考えて……やはり愛している……
という……事が分かつた……それでも……憎んで……いる事
にしないと……黄泉の国……は統率が……取れなくなる。それ

を……察した燐には……もつと……考えて……生きて欲しいと……思った」

燐が肩の痛みで朦朧としている時に感じたのは、背中が濡れている事と愛おしい温もりだった。紬が泣いている。そう思つたときに燐の意識がはつきりしてきた。

「燐姉！燐姉！」

「紬……桃は？」

「桃姉が嫌な予感がするから追いかけろつて、行かせてくれたんだよ。こんな事をさせる為に一人で行かせたんじゃないよ！」

紬は燐に手当をしながら涙と泣いていた。

「でも、私は」

「ボクと桃姉の大事なお姉ちゃんだよ！」

「……そつか。ごめんね」

「絶対に許さない！後で桃姉にも怒つてもらう！」

それでも身体が既に自分の物とは思えないような違和感に囚われている燐は自分が何者だろうと妹達だけは絶対に守り切る事を誓つた。

「燐……は正しさに……囚われて……いる。それは……もう呪いと……変わらぬ」

『イザナミノミコト』様……」

「人と鬼……に関わらず……善い者……悪しき者は……いる。立場が……変われば……己が……悪になる事も……あると……努々……忘れるな」

「は……い」

燐が返事をすると『イザナミノミコト』が身に着けていた羽衣が燐の懷にするりと入った。

『憑き人』……は……鬼とは……関係……ない

「え？」

「何者か……が作り出している……」

燐と紬は顔を見合させていた。『憑き人』が現れた時期と鬼ヶ島の結界が弱まつた時間が重なつた為、原因が鬼だと思い込んでしまつて

いた。

燐は本当に自分では何も考えず、状況や誰かに言われた事をただ信じて生きてきたのだという事を認めざるを得なかつた。

「村に・・・帰る前に・・・三ヶ所・・・社に行くのだ・・・」

「社ですか？」

「村を・・・囲むように・・・その社は・・・ある」

「そこには結界に関する何かがあるのでしようか」

「そう・・・そして・・・死者の入り口で・・・待つている・・・娘を・・・必ず連れて・・・行くのだ」

「桃を!? どういう意味ですか！」

「行けば・・・わかる・・・」

そう言うと、『イザナミノミコト』は二人の目の前から煙のように消えていった。完全に消える寸前に一言だけ伝言を残して。

「燈子と・・・月代に・・・頼まれたことはしたと・・・伝えよ」

帰り道は襲われる事も無く入口まですんなりとたどり着いた。入口では桃が岩を背に座り込んでいた。

「お帰り」

「桃姉怪我してない?」

「桃! 大丈夫!」

「こつちの台詞」

そう言うと紬をじろりと見つめた。

「ボクが着いた時にはもうこうだつたんだよ! むしろ逆だよ! 間一髪ボクが間に合つたんだつて!」

紬が慌てて言うと、次に桃は燐をじつと見つめて

「説明して」

と言ひ放つた。かなり怒つてゐるようだ。

燐はため息をした後、怒られるのを覚悟で『イザナミノミコト』とのやり取りを隠さず全て話した。桃は最後まで黙つて聞いていたが、聞き終わるなり燐に向かつて何か投げつけた。子狐の姿で眠つていた黎だつた。

「自分で、刺した?」

「ああ、うん」

「馬鹿」

「・・・ごめん」

「鬼なの?」

「鬼の血が流れているって言っていたわ。純粹な鬼なのか、混血かは・・・わからないわね」

「身体大きくない。胸も」

「失礼ね!恐らく知識の方に秀でているんでしょうね。術を覚えるのが早かつたのも頷けるわ」

「人食べたい?殺したい?」

「食べたくない!殺したくもないわよ!」

「じゃあ問題ない」

「でも、二人とは違うのよ?」

「紬がそう言つたの?」

「紬は・・・それでも姉だと言つてくれたわ」

「そう。私達のお姉」

「・・・ありがとう」

話が終わると、紬が燐に飛びついてきた。燐は自分でも気づかないうちに泣いていたからだ。桃も燐に頭を預けて寄り添つてきた。そして、三人で泣いた。

心身ともに限界に近かつた三人は近くで眠れる場所を探し、休息を取りつた。紬はあつという間に寝てしまつたようだ。

「桃、起きている?」

「うん」

「私達の村の周辺に三ヶ所社があるらしいの。そこに結界に必要な物があるらしいわ」

「帰る前に寄る?」

「ええ、そうなるわね。・・・そこには桃を必ず連れて行くように言われたわ」

「そう」

「もしかしたら、いえ何でもないわ」

「私が・・・化け物だつたら嫌いになる?」

「な・ら・な・い」

「本当に?」

「こんな可愛い化け物が居たら、一緒にいるわ。いつまでも」

「うん」

— ???

「そう。『イザナミノミコト』様も余計な事を言つてくれたものだわ。
桃の変わりようも気になるわね・・・ええ、お願ひ」

そう言うとパンつと手の平を叩いて式神を札に変えた。

「欺いてやるわ・・・その為にも舞台を整えなければ」

社巡り編

14話

三人は『イザナミノミコト』に言われた通り、村に戻る前に社を目指していた。とは言え、村の周辺にあるらしいので村に向かつているのと変わりはない。

「ボクは『雉の社』しか知らないんだけれど、他に二か所もあるの?」「ええ、山の後ろに『犬の社』、川上に行つた所に『猿の社』があるわ。燈子さんには近寄らないように言われていたけれど」

燐と紬が話している少し離れた後ろで桃が歩いていると、黎が話しかけた。

「黄泉の国での記憶はあるか?」

「紬と二人で死人を相手にしている途中……気が付いたら一人で座つて眠つていた」

「あの時、急に意識を失つたと思つたらお前じやない『桃』が出てきたぜ」

「どういう事?」

「さあな。俺にもわからないが、明らかにいつもと様子が違つていたぜ。燐が危ないからつて紬を中心に行かせて俺とお前で残りの相手をしたつてわけだ。惡意があるとは思えなかつたが」

「そう」

「燐と紬には黙つているように言われていたが、契約だからお前には伝えても問題ないだろ」

「……」

「そいつは眠る前に犬の社に向かえつて言つていたぜ」

「ありがと」

桃は燐と紬に追いつき、最初に『犬の社』に向かう事を提案した。二人は桃が珍しく自分の意見を率先して伝えてきた事と、一番遠い社を選んだ事に驚きを隠せなかつたが、特に反対する理由もないのに『犬の社』に向かう事にした。

「ねえ、せつかく三人いるんだからそれぞれの社に行けばいいんじゃないの？」

『イザナミノミコト』が仰っていたのを紬も聞いていたでしょ。必ず桃を連れて行かなければいけないって

「そこがまた不思議なんだよね。桃姉が行かないといけない理由つて何なのだろ？」

「まずは行つてみないと分からぬわね。桃に危険が迫るようであれば、二人で守るわよ」

「もちろん！」

—犬の社

「少し離れていただけなのにとても懐かしく感じるわね」

「うん」

三人での帰路は『憑き人』と遭遇することも無く無事に『犬の社』に辿り着くことができた。異変は社の中に入つたときに起きた。中には『犬の牙』が祀られていた。燐が近づくと持つていた羽衣が勝手に懷から抜け出て、『犬の牙』を包んでしまった。羽衣は少し輝き、燐の懷に戻つたが、『犬の牙』は消えていた。羽衣が取り込んでしまつたようだ。

「これが社に来た理由？これを後二か所で……！」

燐が言いながら振り返ると桃が倒れていた。

「桃！」

「桃姉！」

二人がどんなに呼びかけても目を覚まさない。

桃は見覚えのある、大きな桃の木の下に居た。燐と紬の姿は無く、

目の前に小さな少女が立っていた。

「お嬢さんは、誰？」

「桃」

「貴方も桃っていうの？」

「違う」

「？」

「二人とも、同じ桃」

「どういう事？」

「二人は一緒にならないといけないの。でなければ自分を見失うから」

「ごめんね。言っていることが分からない」

「今はそれでいいの。『雉の社』にいる桃が教えてくれる」

「『雉の社』にもいるの？」

「うん。『雉の社』の桃は何でも知っている。でも『猿の社』の桃には気を付けて」

そう言うと、少女は桃の胸に手を当たた。すると少女の姿が足元から徐々に消えていき、桃に触れている手が最後に消えた。まるで桃の身体の中に入つたかのように。桃は目の前が歪んで目を開けていらなくなつた。目を閉じる瞬間、少女の声がかすかに聞こえた。

「自分を見失わないで」

「桃！」

次に桃が目を開けると耀と紬に見下ろされていた。辺りを見回すと『犬の社』のようだ。社の中で氣を失つていたらしい。先程少女と話していたのは夢だったのだろうか。それにしてははつきりと内容を覚えているし、何より頭がはつきりしている。

桃は物心ついた時から頭の中に霧がかかっているように感じていた。言葉では表現し難いが、その霧に思考を止められているようだつた。結果、周りからは考えるよりも体が先に動いているように見られてい

たのだろう。その霧がすっかり晴れていた。

「ごめん。大丈夫」

「本当に？振り返つたら桃が倒れていたから驚いて心臓が止まるかと思つたわよ！」

「どれくらい倒れていたの？」

「そんなに時間は経つてないけど、ボク達どうしたらいいかわからなくて・・・あんまり驚かせないでよ！」

二人は本当に心配そうに顔を覗き込んでいる。桃は少し悩んだ後「もう大丈夫だから。次は『雉の社』に行きたい」

「もう動いて平気なの！」

「うん。それと二人に聞いてほしいことがある」

桃はそういうとすぐさま立ち上がりて社を出た。燐と紬は追いかけるように社から出てくる。

「ボク達に話があるって何？」

「多分、『雉の社』でも同じことが起きると思う」

「！」

燐と紬が同時に息をのんだ。

「それは・・・どういう事？」

「まだ分からぬ。でも『雉の社』ではつきりすると思うから」

「そんな、倒れることがわかっているのに桃姉を連れて行ける訳ないよ！」「イザナミノミコト」は一体何を考えているのさ！」

「紬、落ち着いて。これは必要なことだと思う、から」

「落ち着けつて・・・！」

「紬、待つて。桃、行かなければいけない何かがあるのね？」

「うん」

「そう・・・なら『雉の社』に向かいましょう」

「燐姉！」

「最初に一人で約束したでしょう？桃を信じて、それでも危険な事があれば私達が絶対に守るわよ」

紬はそれでも反論しようとしたが、燐の顔を見て黙つて頷いた。燐の瞳に決意を感じたからだ。

「ありがとう」

桃は二人を誇らしく思つた。こんなに頼れる姉がいることを。こんなに心配してくれる妹がいることを。今までにも桃は二人に助けられてきた。自分が何者かもわからずに。社に行けばそれが分かるかもしれない。そうすれば二人の事を助ける側になれるかもしれない。そう思うと自然と歩く速度が速くなつてしまつた。

—雉の社

三人は『雉の社』の前で一度立ち止まり、中に入つてからの事を確認した。

「中に入つたら私は祀られている物を確認するわ。『犬の社』と同じであれば、羽衣が動くと思うから。紬は桃の後ろに居てあげて。また倒れてしまうような事があつたら支えて私に教えて頂戴」

「ボクがしつかり受け止めるよ！だから桃姉、早く目を覚ましてね」

「うん。二人ともお願ひい」

燐が二人の顔を見て領いた後、『雉の社』の扉を開いた。中に祀られていたのは『雉の羽根』だつた。『犬の社』同様、燐が近づくと羽衣が燐の懷から出てきて『雉の羽根』を覆う。羽衣が更に輝きを増し燐の懷に戻ってきたときには、『雉の羽根』は羽衣に取り込まれていた。

「燐姉！桃姉が！」

紬の叫び声で燐が振り返ると、紬が気を失つている桃を抱えていた。

桃は五人で暮らしていた家の囲炉裏に座つていた。向かいには少し大人びて見える桃が座つている。

「貴方は？」

「桃よ。あまり驚いているようには見えないわね」

『犬の社』で女の子から聞いていたから。死者の入り口で黎と戦ったのは貴方？

「そうよ。あの時、姉様が危険だつたから少し強引に代わつてもらつたの」

「ありがとう・・・なのかな」

「自分にお礼を言う必要はないわ」

そう言うと、いつの間に淹れたのかお茶を渡され、二人はしばらく無言でお茶を飲んだ。桃は自分と向かい合つてお茶を飲んでいる事を奇妙だと思いながらも、自分は普通では無いのだなど納得せざるを

得なかつた。

「貴方は何でも知つてゐるつて聞いた」

「桃という名を持つ者の事に關していえば、確かに誰よりも詳しいわ」

「教えて」

「どうして？今の自分では何か不満？」

「皆を守れるようになりたい・・・から」

「それなら今のままで充分ではなくて？」

「・・・」

「自分に隠し事をしても意味がないでしよう」

「もしも、人間じやなければ・・・化け物だつたら皆と一緒ににはいられない・・・から」

「あら、姉様も鬼の血を持つのでしょうか？」

「お姉とは違う、から。もしお姉や紬を傷付けてしまうのなら・・・」「自分が何者かを知りたいのね。それがどんなに過酷な運命であつても」

「うん」

自分に見つめられた桃は俯きながら答えた。燐と紬は守りたい。だが、それは自分でなくとも構わない。自分が傷付ける存在なのであれば一緒にいるつもりはない。その覚悟で桃は『雉の社』に来たのだ。「いいわ。少し長くなるけれど目が覚めた時にはそんなに時は経つていない筈だから構わないわよね」

桃は黙つて頷き、自分が語り始めた内容に耳を傾けた。

「貴方は幼いころに口減らしで親に捨てられた普通の人間よ。捨てられた時まではね。貴方は一人で彷徨つているところに賊と出くわして殺される筈だつた。その時たまたま『私達』が貴方の中に入つてしまわなければ」

「貴方・・・達、は誰？」

「私はそうね。『アマテラスオオカミ』と『スサノオノミコト』という神の忘れられた子のようなものよ。『アマテラスオオカミ』が『スサノオノミコト』の持つていた十束剣とつかのつるぎを噛み碎いて、霧を吹き出した事があつたわ。その時に宗像三女神むなかたさんじよ

しんという女神が生まれたの。その霧に残っていた『アマテラスオオカミ』の残り滓かすのようなものが私よ。それが下界に降りて貴方の身体に入り込んでしまったの」

自らを残り滓と呼んだ時、少しだけ悲しそうな表情をしたがすぐに険しい顔に変わり話を続けた。

「でもその霧には『スサノオノミコト』の残り滓も混じり合っていたわ。『スサノオノミコト』の残り滓は貴方の身体を使って賊を殺したわ。それは惨い程に。私は貴方に残酷な記憶を抱えて生きて欲しくなかつた。だから人格を三つに分けて、私以外はそれぞれの記憶以外は忘れるようにしたの。ただ、その時に貴方の人格が半分抜けてしまつたのは私の落ち度だわ」

そういうと、深いため息をついて俯いてしまつた。

「じゃあ、『犬の社』の女の子は」

「貴方の半身よ」

今の中の霧や記憶が抜け落ちる理由が桃には分かつた。

「ごめんなさいね」

「？」

「勝手に貴方の身体に入つてしまつて、人格まで分けてしまつた事で不安にさせてしまつたわ」

「一人だつたら死んでいたなら、感謝しないとね」

「そう言つてもらえると少しは気が楽になるわ……それで、これからはどうしたい?」

「どうしたい?」

「人格を一つにすれば記憶が桃から消える事は無くなるわ。ただし、残り滓とはいえ、神の力も同時に貴方の中に宿るようになつてしまふ。そうすれば人間とは呼べなくなる」

「・・・」

「もう一つ、『スサノオノミコト』の残り滓を制御しないと暴走して本

当に姉様や紬を傷付けてしまう事になるわ」

「!!」

「今ままの人間でいたいのならば、人格は三つに分けておいた方がいいわ。私は余程の事がない限り代わる事はないし、その間の記憶は黎に聴けばいい。『スサノオノミコト』の残り滓は姉様の作ってくれた勾玉で今のところ封じる事が出来ていいから代わる事は無いわ」

そうか、と桃は納得した。いつの間にか首からかけていた勾玉は耀が作ってくれたお守りだと聞いていたが、自分の暴走を防いでくれていたのだ。

「迷っているのならこのままの方がいいと思うわ。ただし、今から『猿の社』に行くのなら一時的に私の力を貸せるようにしておく必要があるわね。私の印を記しておくから、『猿の社』で呼び出して頂戴」

そう言うと、『アマテラスの桃』は桃の左腕に手を当てた。すると少女の時同様に足元から徐々に消えていき、桃に触れている手が最後に消えた。まるで桃の身体の中に入つたかのように。再び桃の目の前が歪んだ。

桃が次に目を覚ました時には紬に膝枕をされていて、二人は心配そうに桃の顔を覗いていた。

「桃姉！大丈夫だつた！」

「桃、おかえりなさい」

「うん。紬、お姉もありがとう」

二人に礼を言つた桃は起き上がり、『雉の社』から出た。左腕を見ると、見慣れない文字が淡く光り浮かび上がつていた。少し目立つてしまいそうなので包帯で隠すことにした。

社の扉は既に開かれている。燐が先に一人で入り、祀られていた『猿の体毛』を羽衣で取り込んでいた。羽衣は金色に光り輝いて燐の懷に収まっている。『雉の社』からの道中で桃の話を聞かされ、『猿の社』がとても危険になる事が分かつていてからだ。二人は最初、桃が『猿の社』に行くことに大反対だった。しかし桃の話を聞き、境遇を考えたら二人が折れるしか無かつた。

「鬼と神の姉がいるのはボクくらいだね！」

「お馬鹿」

燐と紬は心配な気持ちを隠し、努めて明るくしてくれた。万が一、桃が暴走する事を考え、中に入つたら『罠式の術・捕縛型』で拘束する事になつていて。これは桃が紬にお願いした事だ。

「じゃあ、行つてくる」

「気を付けてね」

「絶対『スサノオ』なんかに負けたら駄目だからね！」

桃は領き社に入ると途端に気を失つた。すぐさま燐が支え、紬は印を結び『罠式の術・捕縛型』で桃を柱に縛り上げる。

「桃姉、頑張つて……」

桃は見慣れた森の中に立つていた。辺りは暗闇に覆われていて、血の匂いで辺り一帯を包み込んでいた。

桃は今までと違い見覚えの無い光景に戸惑つた。少し先に小屋があつたので近づいてみようと一步踏み出した途端、背中に冷たい気配を感じた。慌てて振り返ると、紅の瞳をした桃がまさに刀を振り下ろす瞬間だつた。桃はとつさに身をよじつて避けようと試みたが、完全には避け切れず肩の肉を少し抉られ血が滲んできた。桃は次の攻撃

が来る前に小屋まで全力で走り、柱に刺さっていた刀を抜きすぐさま息を整えた。『スサノオの桃』と対峙する為に振り返ると、すでに桃を突き刺そうと刀が迫つてきていた。それを回転し今度は完全に避ければ、その勢いを利用して『スサノオの桃』の横腹に向かつて刀を振りぬいたが、空を斬るのみで『スサノオの桃』を見失ってしまった。桃は小屋の壁を背にして次の攻撃に備えた。左右の木々を警戒していると、正面から人間が投げたとは思えない速度で桃の額目掛けて刀が飛んできた。桃はかろうじて首を曲げて避けるが、掠つていたようでこめかみ辺りから血が流れだす。正面を凝視するとようやく闇に慣れてきたのか、そこかしこに転がっている死体から刀を拾つた『スサノオの桃』がこちらに向かつてゆっくり歩いてくる姿を捉えた。桃は見失う前に一気に距離を詰め刀を振るが、紅の瞳が揺れた瞬間『スサノオの桃』の姿は消え、またも桃の刀は空を斬つてしまふ。圧倒的に速さが違う。逆転の一手はないかと考えようとするが、木の上から降りながらの攻撃を受けるので手一杯になり、思考がまとまらない。桃は刀での押し合いの隙をついて『スサノオの桃』の腹に蹴りを入れ距離を取る。

「コロス！ コロセ！」

『スサノオの桃』が叫んでいる。震えている自分の両腕に視線を一瞬落とし、包帯に気付く。桃は左腕に巻かれている包帯を勢いよく解く。

「アマテラスを！ 解放する！」

桃の左腕で光っていた印が一層眩く光り輝き、いつの間にか『スサノオの桃』の後ろから現れた『アマテラスの桃』は素早く勾玉を『スサノオの桃』の首に掛ける。その瞬間『スサノオの桃』の手から刀が落ち、力なく立ち尽くした。

「呼ぶのが遅いわよ。桃」

『アマテラスの桃』は桃の傍に来て微笑んで見せた。

「あ・・・りがと」

「ひとまずこれで『スサノオの桃』も印として桃の身体に刻み込めるわ」

「『スサノオの桃』だけ身体から出す事は出来ない？」

「残念ながら無理ね」

桃は改めてこんな恐ろしい者が自分に宿っている事に戦慄を覚えた。身体の震えが収まらずどうにもならないでいると『アマテラスの桃』が手を握ってきた。

「いい？人間でいたいのなら人格を分けたまま生きていきなさい」

「う・・・ん」

「それでも、もしも人間をやめる覚悟で力を欲する時が来たら、必ず私を解放してから『スサノオの桃』を解放しなさい。でなければ人格を一つにする前に『スサノオの桃』に身体が支配されてしまうわ。絶対に忘れないで」

『アマテラスの桃』はそれを伝えると再び桃の左腕に印として戻つていった。桃は立ち尽くしている『スサノオの桃』にふらふらと近寄り、自分の中の恐怖を抑え込み右手で触れた。『スサノオの桃』は紅の瞳で桃を睨みつけたまま消えていき、桃の右腕には印が刻まれた。傷の痛みをようやく感じながら桃は目の前が歪み仰向けに倒れこんだ。

桃が『猿の社』で目を覚ますと、耀と紬の姿が見当たらなかつた。『罠式の術・捕縛型』はかけられたままで桃は柱に縛られたままだ。社の外が何やら騒がしい。桃の心がざわついた。

「黎、いる？」

「桃！戻つたか！」

「何が起こつているの？」

「説明は後だ！動けるか？」

黎はそう言いながら『狐火』で桃を柱から解放し、すぐさま刀に変化する。

「お姉と紬は？」

「外だ！俺たちも行くぞ！」

桃は黎を持つと、社の外に飛び出した。社の外は

——『人憑き』で溢れかえっていた。

—— | ???

「あはは！桃がそんな事になつてているの！普通ではないとは思つてい
たけど、これで駒が揃つたわ」

「そうね。私達の願いがついに成就するのね」

紬が桃を拘束した後、二人は合流するまでどんな旅だったのかお互
いに話していた。

「『憑き人』か。結局ボクは遭遇しなかつたな」

「それは月代さんの地図に従つたからでしょ。私達が燈子さんからも
らつた地図は黄泉の国の場所しか書いていなかつたのよ。遠回りも
して、いくつかの村に寄つたから遭遇してしまつたのよ」

「そもそも『憑き人』って何なんだろうね？」

「何つて、妖怪に憑りつかれた人の事よ。紬だつて燈子さんや月代さ
んから教えられているでしょ？」

「それはボクも知つてるよ。だけどそれしか知らないんだよね。見分
けは付くの？」

「瞳よ。『憑き人』になると瞳の色が黄色に変わつてしまふの。でも死
の直前に瞳は元の色に戻るの。恐らく、死にゆく身体から妖怪が離れ
るからだと思うけれど、人として弔つてあげられるのだけが救いね」
「じゃあ、話す事は？ 記憶は？ 元は人間なんだから、暴れるだけなら殺
してしまわなくともいいと思うんだけど」

「私達が遭遇した『憑き人』は人の時の記憶を持つていて、普通に会話
も出来たわ。でもね、段々言つている事がおかしくなるの。『血が飲
みたい、お前の腕を食べたい』つてね」

「え」

「そんな事を言う人を野放しに出来ると思う？ 見た目は人でもそ
うなつてしまえば、もう妖怪と変わらないのよ」

「・・・」

紬が何も言えずにいると社の外から複数の気配を感じ、緊張が走つ
た。直ぐに動けるよう身構えた二人は、扉を蹴破り侵入してきた者を
見て驚きを隠せなかつた。そこには数人の『憑き人』が立つていたか
らだ。今にも襲い掛かってくる気配を感じた耀は、紬を守るように背

中に隠し、素早く印を結び『風斬り（かざぎり）の術』を発動した。『憑き人』達は切り裂かれながら外に吹き飛ばされる。燐と紺はそのまま社から飛び出すと、燐ですら見たことが無い程の『憑き人』で溢れかえっていた。

「な、なにこれ」

「考えるのは後！ 桃がまだ目覚めていない以上逃げるわけにはいかないわ！」

「う、うん」

燐はちらりと紺を見て後悔した。中途半端な説明しか出来なかつたせいで、紺は人と変わらないそれをまだ敵と認識出来ていない。「紺は社を守つて！ 絶対に中に入れないようにして！」

燐は叫ぶと同時に『憑き人』の群れの中に飛び込んで行つた。一人になつた紺は、社の入り口を背にして鎖鎌の颶を握りしめ牽制するも中々攻撃を当てられずにいる。

「つむぎん、ひとつも当つてねえぞ！ 少しでも減らしていかねえと守りきれねえぜえ！」

「そんな事言われても！」

「ちつ！」

業を煮やした颶は自ら刃の軌道を変え、迫つてくる『憑き人』の足を削つていく。

「颶！」

「わかってるよ！ 殺したくねえんだろ！ それでもやるしかねえだろが！ それとも桃ちゃんを置いて逃げるか？」

「そんな事、できるかあああ！」

紺は大声で叫びながら近づいてくる順に鎌で動きを止めていくが、それでも致命傷を与えることは出来ずに少しづつ社の入り口へと追い詰められていく。ついには両腕を掴まれ、左右から紺に喰らいつこうとする『憑き人』が口を開き迫つてくる。自分の甘さと覚悟が足りなかつたせいで自らが殺される事よりも、社を守れなかつた事が悔しかつた。

「桃姉・・・ごめん」

「大丈夫」

届く筈がない言葉を呴いた紬の耳元で声が聞こえ、紬へと迫つてきていた首が二つ転がり落ちた。同時に刀を携えた桃が社から飛び出してきて紬の少し前方に着地すると、その場で舞うように一回転した。密集していた『憑き人』は時が止まつたように動かなくなり、桃が紬に向かつて微笑むと同時に血しぶきを上げながら崩れ落ちた。

「桃姉！」

「守つてくれてありがとう。ここからは『私』が紬を守るから」

紬は緊張が解けたようへたり込んでしまつた。耀姉との約束を破らずに済んだ。桃姉を守り切る事が出来た。この笑顔をまた見ることが出来た。そう思うと紬は涙が溢れてしまい何も喋れなくなつてしまつた。そんな紬を優しい瞳で見つめていた桃は囮まれているこの状況を打破する為に、まずは紬の周辺の『憑き人』を一切の容赦無く斬り捨てていく。その斬撃は以前と比べ物にならないくらい速い。解放していいとは言え、『アマテラスの桃』と『スサノオの桃』を両の腕に印として記した事で影響が出ているようだ。

「黎、紬が村まで帰れる道を作る。手伝つて」

「桃がお願いなんて珍しいな。気分がいいから特別張り切つてやるよ！」

黎は九尾の狐の姿に戻り、手当たり次第に『憑き人』を切り裂いていく。

「颶、紬を乗せて村まで戻つて」

「あいよ」

「ちよつと桃姉！ボクも一緒に戦うよ！」

「紬は手を汚さなくていい。『憑き人』は私とお姉で相手するから。ね？」

口を開きかけた紬を既に猫又に戻つてゐる颶の背に乗せ、桃は村の方角に向かつて『炎舞の術』を発動し、一直線に道を作る。

「行つて」

颶は合図と同時に駆け抜けていく。それを見届けた桃は黎を刀に戻し戦場を駆ける。

「桃、後で説明しろよ。お前、別人みたいだぜ」
「うん。とりあえずお姉と合流してからね」

「どこからこんなに『憑き人』が……」

「人間っていうのは何処にでもいるからな。少しは減つていいじゃないか」

燐は悠の言葉に苛立ちながらも白虎の上から様々な術で『憑き人』を葬つていく。桃と紬が心配で『憑き人』が元は人間だつたという事まで頭が回つていなかつたらしい。それを悠が思い出させるように続けた。

「ま、よかつたじやないか。燐は人間じやない。同族殺しにならんさ」「それ以上言うなら契約破棄するから」

「わかつたよ。これ以上何も言わないさ。それより見ろよ。あれは燈子の式神じやないか？」

言われて見渡すと、確かに燈子の式神であろう鳥が上空を飛んでいる。燐は印を結び、手の平をぱんっと叩くと、鳥は燐の近くまでやってきて札に戻つた。燐がそれを拾い上げ確認する。

「！」

札に書いてあつた文字を読んだ燐の顔色が真つ青になり、白虎に村に向かうように命じた。

「何が書いてあつたんだ？」

「悠、黎に急いで伝えて。私達の村に……『憑き人』が現れたわ」「憑き人」を薙ぎ倒しつつ村に向かっていた燐だつたが、道中で殺してきた『憑き人』について考え込んだ。その間にも白虎は村に向かい、目の前に新たに襲ってきた『憑き人』も爪で切り裂く。そこで燐は確証を得た。今まで殺してきた中に村の人間もいた。

「何てこと……」

燐は顔を覆いたくなる思いを堪え、顔をぐつと上げた。燈子が式神を飛ばしたという事は燈子と月代だけでは対処し切れない状況なのだろう。今は思考を巡らせたり、落ち込んでいる場合ではない。そう自分に言い聞かせ、燐は理性を保つていた。ようやく村が見える所まで辿り着いた時、複数の『憑き人』が地面に転がり、その中で一人立

つ見慣れた背中を見つけ、慌てて白虎を止めた。

「紳！貴方『憑き人』を……」

うん、ホケちゃん」と出来たよ」

「おお、無事なの？」

「机姫が机に先に着いて、一言、一くわんたり」

ど、先に一人で向かうわよ！」

「知つてゐるよ」

「ん？」

「ホク達も急がないとね」

絶句・詠花の名句

辛うじて保つていた理性は粉々に碎け散り、膝から崩れ落ちた。耀

桃は紺を行かせた後、燐と合流する為森の中を駆けていた。森の中でも『憑き人』は桃を襲つてきたが、桃は片つ端から切り伏せていく。一人一人は問題では無かつたが、あまりにも数が多くつた。燐に合流出来ずに焦つて動きが散漫になつていた事もあり、桃の身体は傷だらけになつていた。

桃、
悠から報せだ！村で合流だとよ」

「何事、お姫様は無事なの？」

「一・」

桃は眼前の『憑き人』を切り伏せ近くの木に飛び乗ると、そのまま木々を飛び移り村に急ぐ。気が付けば村にかなり近い所まで来ていたようだ。ここからなら時間はかからずくに村に着くだろう。桃は最短距離で移動していたが、視界の端に燐と紬を捉え、木の上で立ち止

まる。二人が無事だつた事に一瞬安堵したが、なぜか燐が膝をついている。桃は、木から降りて二人に近づきながら声を掛ける。

「お姉、どうしたの？」

燐は声を掛けてもこちらを向こうともしない。代わりに紺が答えた。

「桃姉、無事だつたんだね。ボク一人で来てしまつたから心配してたんだ」

「紺も無事で安心した。お姉はどうしたの？」

「ボクも今会えたばかりなんだ」

何か様子がおかしい。桃は燐の肩を揺すり、声を掛けるが、燐は虚空を見つめている。紺に詳しく聞こうと振り返ると、まさに今刃が振り下ろされるところだつた。反射的に避けようとすると、躊躇しきれずに左足に痛みが走る。桃の足を貫いたのは鎖鎌だつた。

「紺!？」

「桃姉、ボク何だかおかしいんだ。桃姉の声が聞こえたら、その血が飲みたくなつて堪らなくなつて。燐姉を見てしまつたら、その腕がとても美味しそうに見えて堪えられないんだ」

「何を言つて……！」

激痛の中、見上げた桃は燐の様子がおかしい理由を理解した。紺の瞳は

——黄色だつた。

最終話

紬はゆっくりと桃から刀を抜き、分銅を持て余すようにぐるぐると回している。燐は紬の瞳を見たのだろう。指一つ動く気配が無い。

桃は、『憑き人』になってしまった紬の瞳から目を離せなくなつていった。不意に怪我した足を踏みつけられ、呻き声を漏らす。

「燐姉と桃姉をさー！食べたくて飲みたくて食べたくて飲みたくて…」

「紬！」

桃が叫び、紬は黙つた。

「欲望に流されないで。お願ひ」

「桃姉はさ、『憑き人』になつた事がないからそんなに氣楽な事が言えるんだよ」

『憑き人』の欲望を抑える事は決して容易じゃないのは今まで見てきて知つてゐる。でもまだ私と紬は話しが出来てゐる。それは紬が強いため。それはとても凄い事なんだよ」

桃はどうしたら紬を人に戻せるか必死に考えていた。今までの『憑き人』は救う術がなかつた。『イザナミノミコト』にも言われた。それでも紬は己と必死に戦つてゐる。自分が諦めるわけにはいかなかつた。

「いつまでも抑えられるわけがないじゃないか！」

「私も手伝うから。さつき約束したものね。紬の事は私が守るつて」

「それじゃあ……証明して見せてよ！」

紬は踏みつけた足をそのままに斬りかかつてくる。桃はそれを刀で辛うじて受け止めるが、痛みと地面に横たわつてゐるせいで徐々に力負けしていく。紬は元々の身体能力に妖怪の力が上乗せされ、今や桃と同等以上に強く、速かつた。桃は自分の両腕に巻かれている包帯を一瞬見て『スサノオの桃』の封印を解くか悩むが、暴走した自分を止めてくれる燐があの状態では危険過ぎると踏みとどまつた。桃は紬の刃を横に逸らすと同時に右足で紬の腹を蹴り上げる。踏まれていた足が自由になつた一瞬を見逃さずに横に転がり、なんとか体制を

立て直した。ひとまず耀だけでも逃がす為、桃は耀の肩を揺すり、声を掛ける。

「お姉、逃げて。お姉」

しかし、桃の声は届かない。意識を紬に戻すと、いつの間にか多数の紬に囮まれていた。『罠式の術・幻術型』だ。紬達は一斉に印を結ぶ。桃は本物が分かつていてるかのように、その内の一人から放たれた『炎舞の術』を『守の陣』で防ぐ。周りの紬は札に戻ったが、衝突した際の煙で紬を見失う。

「よく本物のボクつて分かつたね！」

「妹を見分けたくらいで驚かないで」

何処からか紬の声が聞こえてくる。桃は話しながらも周囲の気配を探る。

「おい、桃も術を使えよ。『守の陣』だけじゃ切り抜けられないぞ」「駄目。紬に術は使えない」

木の上の気配に気づいた桃は、降りてくる勢いのまま振り下ろす刀を両手で握りしめた刀で受け止める。紬は受け止められるのを予測していたかのように、流れるように桃の腹に拳をめり込ませる。桃が呻き声を上げ、身体をくの字にした所を紬のかかと落としが容赦なく後頭部に刺さり、桃は地面に叩きつけられる。そのまま紬は鎌を振り下ろすが、横に転がり立ち上がる。殴られた腹の痛みで呼吸が上手く出来ないが、整えている暇は与えてくれない。紬から視線を外さないまま距離を取ろうとした時、

「桃！」

黎の声で腹のあたりが光っているのに気が付く。『罠式の術・爆破型』だ。『守の陣』は間に合わないと判断した桃は、左手で札を握りしめそのまま頭上に掲げた。札は爆発し、桃の左腕から血が飛び散った。指は五本とも残っているが、少しでも動かすと激痛で意識が飛びそうになる。桃は意識を保つ為に唇を噛み、口から血を流す。紬が相手では戦いながら考える余裕など無かつた。

「無茶するなあ！下手したら左手無くなっちゃうよ！」

「妹が使う術の威力くらい、分かる」

桃は刀を地面に突き刺し素早く印を結んだ。周りの草が伸びて紺を木に縛り付ける。『罠式の術・捕縛型』だ。

「桃姉も使えたんだね！」

「紺みたいに上手くは使えないけど」

時間稼ぎにしかならないだろうが、今のうちに打開策を見つけなければ。珍しく焦りを隠せない桃とは反対に冷静な表情の紺はため息をつく。

「桃姉、もう止めようよ。最初から今のボクを止めるなんて無理だつたんだよ」

「無理じゃない」

「それはボクが燐姉を狙つていないから、だよ」

「・・・」

「燐姉の言う通りだつたよ。『憑き人』になつてしまつた人は、殺さないと救えない」

黄色い瞳から涙が一筋零れ落ちる。

「はやくボクを殺してよ！」

紺の叫び声が桃の心に突き刺さる。紺が苦しんでいる。紺の言う通り、殺す事のみが救う事になるのだろうか。燐だつたらどうするか。

縛られていた紺は、力を込め拘束を解き、燐に向かつて一直線に駆け出す。桃は燐を守るために足を引きずりながらも間に割つて入り、刀を振り上げた。紺の望みは自分しか叶えられない。それが燐と紺を助ける唯一の方法だと自分に言い聞かせた。しかし、振り下ろそうと力を込めた瞬間、

一緒に過ごした過去が脳裏をよぎり、そのまま動けなくなる。紺は迷いなく刀を桃の肩口に振り下ろした。桃は肩口の激痛に耐えらず、その場に倒れこむ。桃を見下ろした紺は、燐の首筋に刀を持つていた。

「このままではボクは燐姉を殺してしまうね」

「嫌……やめて」

「ボク達さ、不思議と喧嘩した事無かつたよね。だから桃姉と戦つた

のが姉妹喧嘩をしているようで嬉しかったんだ。だけど、そろそろ終わらせないとね」

「紬！」

このまま紬は燐を殺すだろう。そして自分も殺される。普通の『憑き人』とは明らかに強さが違う紬を止めることは困難だ。誰かが紬を殺すまで関係のない人を殺して回るのだ。そう桃は考えてはつとし。誰かが？何て勝手な考え方だ！自分の手を汚さずにどこの誰かも知れない人に妹を押し付けるつもりなんだ！そしてその時まで紬に殺される人達を見殺しにするつもりなんだ！そう無意識に考えていた自分に桃は気づいてしまった。紬の願いは分かつてているのに。

「紬」

桃に声を掛けられ、もううんざりという顔しながら桃の方を見た紬は戦慄した。桃の両眼が開いている。そして紅の左目が揺らいだ時、殺気の塊をぶつけられたように感じた紬は、慌てて後ろに飛び退いた。桃は立ち上がり刀を紬に向ける。

「今から貴方を斬る。だから紬も全力で私を殺しにきて。『憑き人』としてではなく紬として」

「桃姉……」

「私が斬るのは『憑き人』ではなくて紬だから」

それは『憑き人』になってしまった紬を殺すのではなく、『妹の紬』を殺すという桃の覚悟だった。紬は自分の事をまだ人だといつてくれた事を理解し、泣きながら桃に尋ねた。

「桃姉、ボクの事好き？」

桃は答える代わりに、優しく微笑んで見せた。紬は泣き止むと、照れそうにはにかんだ。

二人の笑みが消えた時、紬は一直線に駆けだした。

桃も怪我人とは感じさせない動きで駆け出し、桃と紬は交差した。先に動いたのは紬だった。ゆっくり燐に向かつて歩き出した。桃は刀を鞘に納め、背を向けたまま震えた唇を噛み締めた。

「紬……大好きだった」

桃の足元に血だまりが出来ていた。桃は最後まで妹を斬る事が出

来なかつた。

「燐姉、燐姉つてば」

呼ばれているのに気が付いた時、燐の目の前で泣いている紬がいた。随分と長い夢を見ていたようだ。紬が『憑き人』になるなんて、あまりにも酷い悪夢だった。紬はいつもの泣き虫のままだ。

「つむ……」

紬は泣いたまま無理矢理に笑顔を作ると、燐の腹に刃を突き立てる。燐の悪夢は続いていた。紬が刃を抜くと、そこから血が噴き出し、紬に降り注いだ。紬は躊躇なく燐の首を斬り落とす。

「あはは、燐姉が死んだ」

紬は燐の身体に身体を埋める。紬はしばらくすると、満足したかのように燐の首を桃の目の前に転がす。辛うじて息があつた桃はうつろな目でそれを見つめる。

「お……お姉……」

「燐姉はねえ！死んじやつたよ！桃姉のせいで！」

紬は高笑いをしている。そして、真実を桃に伝える

「！」

紬は桃の悔しそうな、そして悲しそうな顔を見下ろす。桃は黄泉の国での会話を思い出した。

「……『イザナミノミコト』が言つていた『憑き人』を作り出している人間も『あの人』……」

「うん！ そうだね！ 絶対そうだよ！」

紬は楽しそうに相槌を打つている。

「でも『あの人』を止められる人はもういないね！ 桃姉が！ ボクを！ 殺さなかつたから！」

そう言うと紬は桃の首に口を近づけ、貪りついた。聞くに堪えない音が止んだ後、紬は血まみれのまま顔を上げる。

紬はそこから見える自分達が育つた村を黄色の瞳で見つめる。

「今から帰るからね……あはは！」

紬は燐と桃の屍を越え、村に向かつて歩き出した……

さて、この話はここで終わりだ。何？こんな結末ありえない？最初に言つたと思うが、信じられなくても私にとつては本当にあつた現実なのだよ。信じてほしいと思つて話したわけではないが、嘘と決めつけるのは遠慮してくれ。君だつて自分が体験したUFO目撃や心靈体験を他人に話した時に信じてもらえなかつたら辛いだろう？そういう事だ。ああ、だけど一つ伝えていなかつたな。

あいにくと私は嘘つきでね。おいおい、怒らないでくれよ。眞実を知りたいのならお互に資格と覚悟が必要なのさ。申し訳ないが今はまだ語る時ではなかつたという事さ。君が悪いんじやない。私に覚悟が足りなかつたのさ。もし、その時が来たらまた会おう。それでは。